

(公財)愛媛県埋蔵文化財センター研究紀要

# 紀要愛媛

第 11 号

---

西南四国の後期旧石器時代……………	多田 仁	1 ~ 28
四国地方中・西部における旧石器時代終末から縄文時代草創期の石斧3 ……	多田 仁	29 ~ 36
愛媛県内出土の東海系中世陶器について……………	首藤久士	37 ~ 46

---

2015

公益財団法人 愛媛県埋蔵文化財センター



## 刊行にあたって

公益財団法人愛媛県埋蔵文化財センターでは、愛媛県内において埋蔵文化財の調査研究および埋蔵文化財に対する保護思想の普及・啓発を目的に業務を進めております。

当センターの調査成果につきましては、調査報告書にまとめ刊行するとともに、調査の概要は年報『愛比売』<sup>えひめ</sup>に掲載し、さらに発掘調査に伴う現地説明会、当センターでの展示会を行い、埋蔵文化財の普及・啓発に努めております。

このたび、当センター職員の埋蔵文化財に関する日頃の研究成果をまとめた研究紀要『紀要愛媛』第11号を刊行することとなりました。この研究紀要が、皆様方の歴史や考古学の研究の上で、ご活用いただければ幸いに存じます。

最後になりましたが、今後とも関係諸機関並びに関係者の皆様に、ご協力とご指導を賜りますようお願い申し上げます。

平成27年5月

公益財団法人 愛媛県埋蔵文化財センター

理事長 前園 實知雄





# 西南四国の後期旧石器時代

多田 仁

## はじめに

西南四国における後期旧石器時代の遺跡は、現在までに43ヶ所を確認することができる(図1)。これら遺跡の多くが遺物の表面採集によって周知されたもので、発掘調査による確認例は非常に少ない。しかし、これまでの研究によって資料の蓄積やその理解も深められており、資料的な制約を伴いながらも旧石器時代の様相を整理する試みが続けられてきた(木村1995・2003、森田2001、山口1997a・bほか)。また、近年ではこの地域に関連した精力的な研究も提示され、従来の編年観に対しての再考や瀬戸内技法の伝播に関する新たな解釈も提示されている(氏家2014、森先2011・2013)。この動向を踏まえ、本稿ではこれまでに西南四国で確認された旧石器時代資料を振り返り、各器種の様相や石器群の編年等、西南四国における様相を理解する上での基礎作業を試みたい。

## 1 研究略史

西南四国における旧石器時代遺物の発見は、木村剛朗氏による池の岡遺跡の報告、十亀幸雄氏による野尻遺跡の報告、山口将仁氏による宇須々木遺跡の報告が早いものである(木村1979、十亀1979、山口1975)。さらにこの時期に前後して『一本松町史』と『高知県史 考古編』に旧石器時代資料の発見が述べられているが(一本松町史編集委員会1979、高知県1968)、詳細について言及したものはなく、木村・十亀・山口氏の報告が初めての具体的な報告として位置づけて良いだろう。その後、1980年代から1990年代初頭には、猪石広明氏、十亀氏、西本則夫氏、山口氏らが西南四国における旧石器時代遺物の資料化を実践してきた(猪石1987・1989、一本松町教育委員会1994、十亀1984、西本1987、山口1989・1990・1992)。これら各氏による報告は単なる遺物の紹介に留まらず、猪石氏による御荘湾周辺の旧石器時代遺跡分布図と編年案や、山口氏による編年案も提示されており、旧石器時代の様相を理解する上での基礎的解釈が積み上げられた<sup>1)</sup>。さらに『愛媛県史 原始・古代I』と『愛媛県史 資料編 考古』の発刊も、この地域の資料を検討する上での補助的役割を果たしている(愛媛県史編さん委員会1982・1986)。

また、この時期には十亀氏と山口氏による器種認定をめぐる論争もあった(十亀1984、山口1975・1989)。これは宇須々木遺跡採集の石器に関するもので、山口氏によってナイフ形石器として報告された遺物に対し、十亀氏はこれを小形船底形石器(角錐状石器)と位置づけた事例である。この件については山口氏による反論が示されたが、十亀氏による反論はなく、さらなる論争の発展は見られない。山口氏による反論内容とその後の状況をふまえれば、宇須々木遺跡の遺物は当初に山口氏が位置づけたナイフ形石器と再評価して良いだろう。こうした石器の器種認定を巡る議論は、旧石器時代研究の先進地では非常に少ないことと思われるが、これは各研究者が一

つの遺物を貴重な研究材料としていた現れであろう。この時期の西南四国は遺跡数も少なく、これを対象とした研究者も少ない状況であったが、彼らの熱意は後の類例増加と研究の前進に繋がったと考えられよう。

1989年には和口西の駄場遺跡において、岡山大学と御荘町教育委員会(当時)による試掘調査が実施されている(和口遺跡調査団1989)<sup>2)</sup>。この調査は試掘とはいえ西南四国における初めての旧石器時代遺跡の発掘であり、当時は大きな話題として報じられた(本田1989)。ちなみにこの頃には十亀氏による「四国西部における国府系石器群」、猪石氏による「南宇和郡御荘町和口遺跡発見の旧石器について」と題した研究発表が行われており、既に和口西の駄場遺跡は調査以前から周知されていたことがわかる(猪石1987、十亀1988)。また、この遺跡で確認された石器類に瀬戸内技法が含まれていたことも、当時としては非常に興味深い現象として捉えられたであろう。1988年に行われた十亀氏による研究発表は、同年の12月3・4日に開催された中・四国旧石器文化談話会で発表されたものであるが、翌日の同年12月5日には稲田孝司氏らが和口西の駄場遺跡を訪れ、試掘調査の実施が具体化したようである(本田1989)。そして、翌年1989年の5月に試掘調査の実施となった早い対応から考えれば、西南四国における瀬戸内技法の発見が研究者達にとって注目すべき事象であったと推察できよう。

この時に行われた試掘調査では、12ヶ所のトレンチ(四辺2～3m規模)が設定されているが、良好な遺物包含層の検出は言及されていない(本田1989)。また、調査については翌年の中・四国旧石器文化談話会でも報告されているが、その後の追加報告は管見できない。和口西の駄場遺跡では表面採集による遺物は多く確認されているものの、未だ層位と結びついた論証はなく、今後も正式な報告が待たれるだろう。

和口西の駄場遺跡の発見は、本地域における旧石器時代研究に大きく影響したことは想像に難くない。例えば調査後に公表された山口氏による高知県の旧石器時代遺跡の論証、木村氏による著書の刊行等を見ると、瀬戸内技法による石器群の報告が西南四国の各地で増加し、これを手掛かりとした編年試案の提示にも繋がっている(木村1995・2003、山口1997a・b)。さらに近年では瀬戸内技法の伝播と波及に関わる論証材料として扱われる等(森先2011・2013)、今後も多くの追証が期待される遺跡として位置づけられよう。

さらに和口西の駄場遺跡に次ぐ発掘事例としては池の岡遺跡(A地点)と影平遺跡がある。これは1990年頃に計画された圃場整備および保安林整備事業に伴う試掘調査で、別府大学と津島町教育委員会(当時)によって行われている(橘1991・1992)。調査は1991年に池の岡遺跡、1992年に影平遺跡で実施され、各遺跡で旧石器時代の遺物包含層を確認している。池の岡遺跡で確認された遺物包含層は第I文化層と呼ばれ、スクレイパーと使用痕のある剥片が1点ずつ出土している。さらに影平遺跡C地点で第1文化層と呼ばれる遺物包含層が認められ、スクレイパーや剥片等、約40点の石器が出土している。各調査では石器群の詳細な時期を把握するための指標的な石器は出土していないが、旧石器時代の範囲で捉えられる遺物包含層を確認できたことは大きな成果であった。

前述2遺跡の調査は愛媛県と高知県の県境付近に形成される御檜盆地に立地する遺跡であるが、ここで再び旧石器時代遺跡の調査が行われたのは、1997年に実施された中駄場遺跡である(多田1999)。この調査は県道建設に伴う緊急調査として行われたもので、1,000m<sup>2</sup>を対象とした調査地は本地域において比較的大規模なものであった。ここでは後期旧石器時代の遺物包含層が確認され、ナイフ形石器を含む46点の石器が出土している。詳細は報告に譲るが、ナイフ形石器の他にスクレイパーや台石等もあり、このうち44点の遺物が16×5m範囲のブロックを形成している。さらに堆積層の火山灰分析も実施され、石器群の上位に鬼界アカホヤ火山灰の降灰層準が、下位からは始良Tn火山灰のそれが確認されている。遺物の良好な出土状況を確認できたばかりでなく、広域降下火山灰との関連も把握できたことにより、今後の編年作業に寄与する有効な手段を得た結果となった。

なお、中駄場遺跡の発掘によって池の岡遺跡と影平遺跡の編年対比も行われており、この結果、池の岡遺跡第I文化層を古相に、影平遺跡C地点第1文化層と中駄場遺跡第III層を新相に位置づけることも考えられた。これは広域降下火山灰および堆積層の比較検討によって実現した、層位編年の第一歩として位置づけられよう。

この他にも1992年に竜ヶ迫遺跡、1994年に池ノ上遺跡、楠山遺跡、1994～1996年にナシヶ森遺跡で発掘調査が実施されており、ナシヶ森遺跡では遺物包含層の検出が実現している(門脇ほか2001、森田1994・1995・1996)。これらの調査によって多くの旧石器時代遺物が得られ、さらには高知県幡多郡大月町域における遺跡発見の増加や、周知されている遺跡からの追加資料も報告されている(木村2003、松村・山崎2000ほか)。同時代資料を補強した点では高く評価できる動向であろう。

さらに九州との関連を示唆した動きもあった。それは池の岡遺跡と深泥遺跡で確認された船野系細石刃石器群の確認である(多田1995)。これは池の岡遺跡で船野技法による船野型細石刃核が、さらに深泥遺跡で同技法によるブランクが認められたもので、後に両遺跡で古くから発見されていたスクレイパー、尖頭器、石斧との関連も指摘されるようになった(多田2002・2008a・bほか)。さらにこれらの発見に続いて平野茶園遺跡、双海中駄場遺跡、ナシヶ森遺跡でも船野技法による細石刃核の報告が相次ぎ、西南四国における船野技法の存在がより強調されるようになった(木村2003、多田2008b)。また、近年においても池の岡遺跡で船野技法による作業面再生剥片の報告があり、これら遺物の技術的な検討からは東九州における同技法と大きな差は認められないことが再確認されている(多田2014)。

以上のように、西南四国では表面採集による地道な発見が続けられたばかりでなく、発掘調査の実施も僅かではあるが実現しており、これらの資料を基にした編年案の提示や精力的な資料集成の作業も行われた(木村1995ほか、山口1997a・bほか)。こうした一連の諸研究や資料の蓄積によって、本地域の研究は次第に充実してきた感はあるが、これは同時に多くの課題を生み出したことにも連動している。今後も資料の蓄積や詳細な分析は、未だ必要な研究分野であると考えて良いだろう。



## 2 遺跡の分布

西南四国における遺跡の分布をみると、四万十川上流域、四万十川中流域、四万十川下流域、宇和島湾沿岸、松田川中・上流域、城辺低地～一本松盆地、宿毛湾～太平洋沿岸といった7ヶ所の区域に大きく分かれるようである。このうち四万十川中流域が最も多く11遺跡(図1の3～13)、次いで宿毛湾～太平洋沿岸が9遺跡(図1の35～43)、四万十川下流域が8遺跡(図1の14～21)、松田川中・上流域が7遺跡(図1の23～29)、城辺低地～一本松盆地在5遺跡(図1の30～34)、四万十川上流域が2遺跡(図1の1・2)、宇和島湾沿岸が1遺跡(図1の22)となる。概観すれば多くは河岸段丘あるいは丘陵上に立地しており、四万十川下流域に分布する遺跡は海浜部に近接する場合が多く、城辺低地～一本松盆地、宿毛湾沿岸に立地する遺跡についても一部では海浜部に面した遺跡が存在している。総じて河岸段丘および丘陵地に立地する遺跡と、海浜部に面した地域に立地する遺跡の2形態が存在することを考えておきたい。

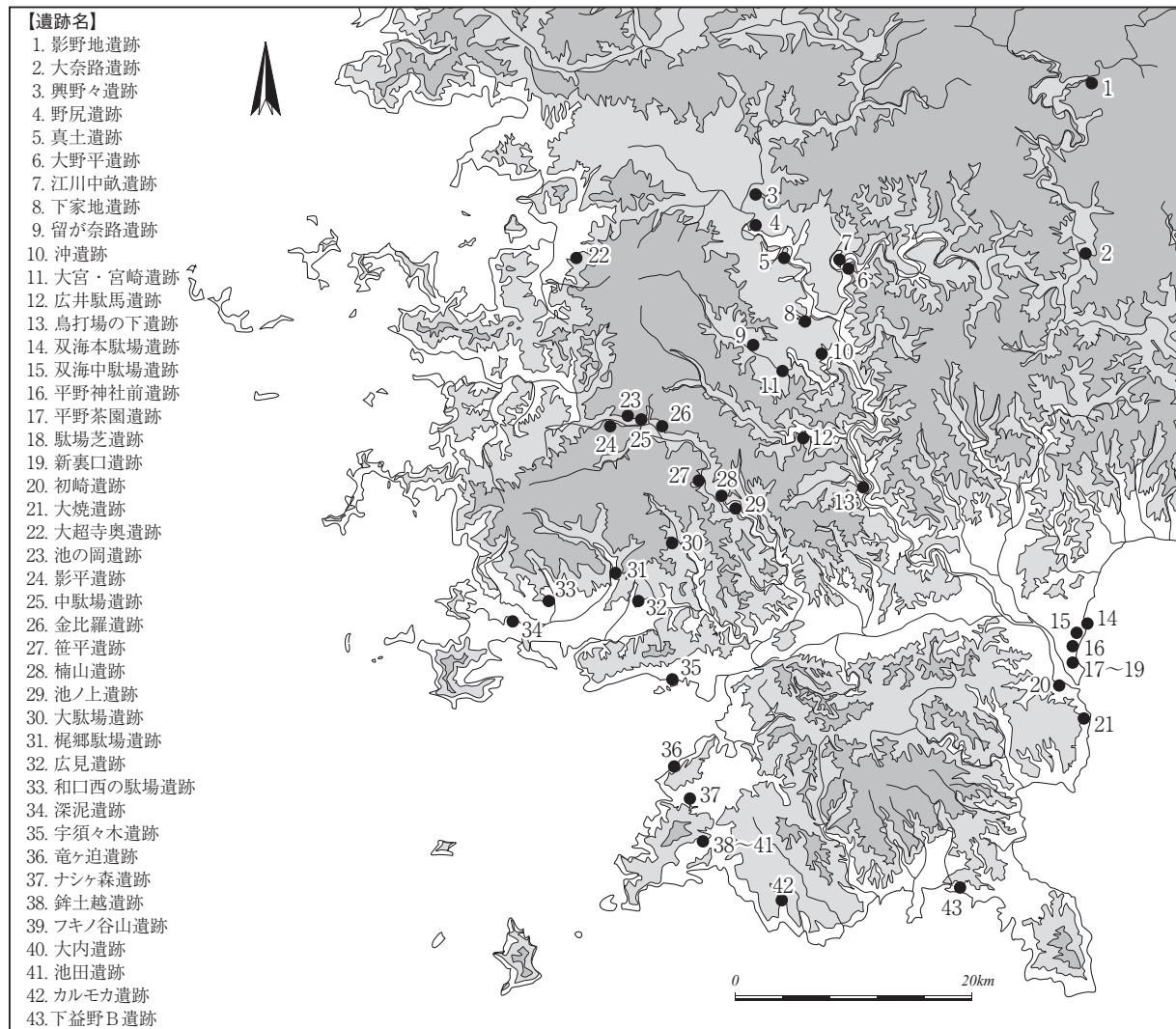


図1 遺跡分布図

### 3 石器の様相

本章では後期旧石器時代の指標的遺物であるナイフ形石器、角錐状石器、細石刃核についてその様相を整理し、各器種の分類案を示して石器群の編年を行う上での指標づくりを試みる。なお、後期旧石器時代に所属する尖頭器と石斧については、全てが細石刃石器群の段階に伴うと考えられるため(多田2000a・2002ほか)、その項で様相を簡単に触れておきたい<sup>3)</sup>。また、本地域では細石刃の確認事例は知られていない。

#### ナイフ形石器

西南四国においてナイフ形石器が確認される遺跡は31ヶ所を数える。また、ナイフ形石器の確認点数は333点を数え、このうち最も多く確認されているのが和口西の駄場遺跡である。この遺跡では現在までにナイフ形石器約242点、角錐状石器6点、石核80点、剥片・碎片約2,000点が確認されており、西南四国の中でも大規模な遺跡として位置づけることができる。

この他にナイフ形石器の確認が顕著な事例としては、平野茶園遺跡(20点)、双海中駄場遺跡(8点)、興野々遺跡(9点)がある(木村1995・2003、木村剛朗さん追悼論集刊行会2009)。これらの遺跡で確認される石器の多くが頁岩製のもので、前述した和口西の駄場遺跡とはほぼ同種の石材を使用している。ただし、すべての遺跡における石器石材の原産地が明らかではなく、遺跡ごとの石材原産地を詳細に判断することは難しい。これは頁岩が西南四国一帯に広く分布することや、個体差の判別が難しいことに起因しており、今後は理化学分析も伴った産地同定作業が必要となってこよう。

発掘調査によってナイフ形石器の出土層位が確認された遺跡には中駄場遺跡がある。この遺跡では始良Tn火山灰と鬼界アカホヤ火山灰の降灰層準が検出され、石器群はこの両者の間から出土している。また、池の岡遺跡、影平遺跡、ナシヶ森遺跡については指標となる石器が認められないものの、後期旧石器時代の遺物包含層の確認が報告されており、多田によって池の岡遺跡第I文化層から影平遺跡C地点・中駄場遺跡第III層への時間的変遷が考えられている(多田1999)。

次にナイフ形石器の分類案を示しておきたい。この作業にあたっては、素材、調整加工(刃潰し加工またはブランディング)の部位、法量を分類基準とする。素材は瀬戸内技法による翼状剥片素材をI類、横長剥片素材をII類、縦長剥片素材をIII類、不定形剥片素材をIV類とした。調整加工の部位による分類は、一側縁加工をa類、二側縁加工をb類、部分加工をc類とする。法量による分類は最大長5cmを基準として、これ以上を1類(大形)、これ未満を2類(小形)とした(図2)。なお、破損度により分類が不可能な遺物は6点あり、これを除いた327点のナイフ形石器について分類が可能であった。

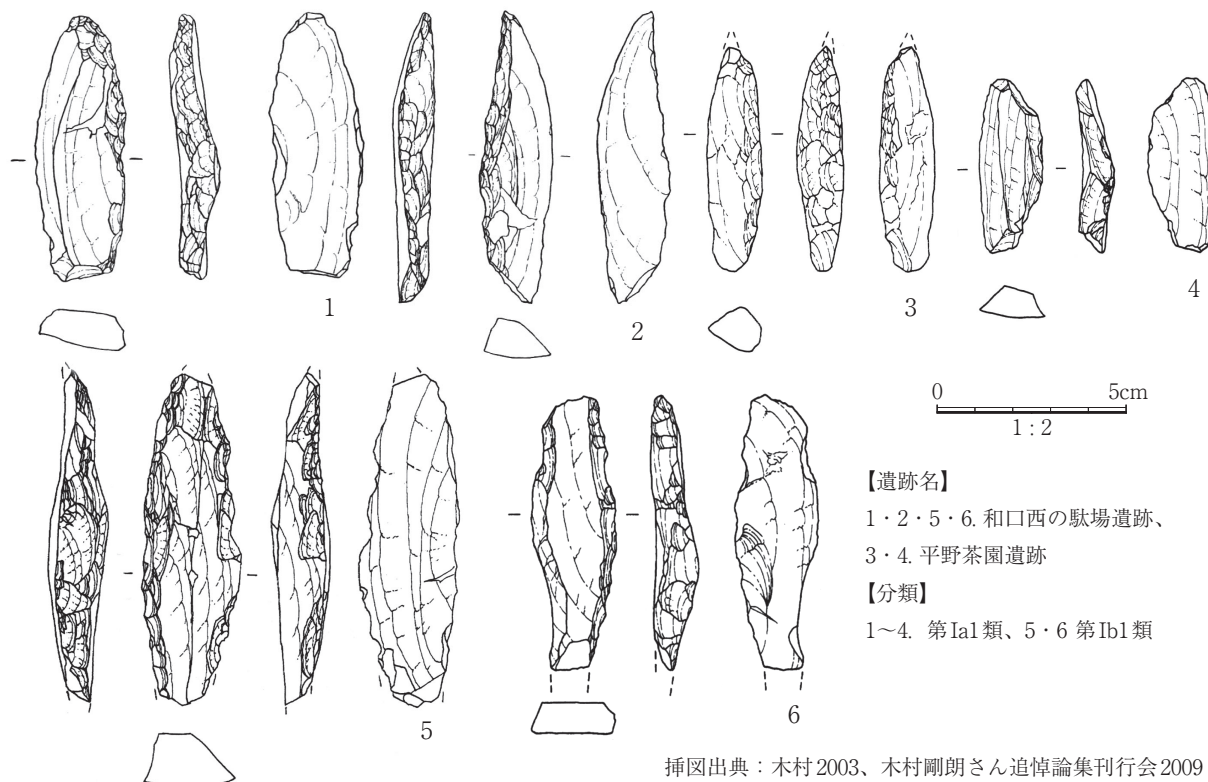
これらの分類組成をまとめてみると、全体比でI類ナイフ形石器は192点(約60%)、II類ナイフ形石器は101点(約30%)、III類ナイフ形石器は30点(約9%)、IV類ナイフ形石器は4点(約1%)となる。I類ナイフ形石器の細分ではIa1類ナイフ形石器が188点(約98%)で多くを占め、II類ナイフ形石器ではIIa1類ナイフ形石器が45点(45%)、IIa2類ナイフ形石器が24点(24%)となり、その他のII類ナイフ形石器は少ない。III類ナイフ形石器の場合はIIIa・b類ナイフ形石器が各々6～7点となり、IIIc類ナイフ形石器は4点と少ない。IV類ナイフ形石器はIVc類ナイフ形石器

	a類(一側縁加工)		b類(二側縁加工)		c類(部分加工)	
	1類(大形)	2類(小形)	1類(大形)	2類(小形)	1類(大形)	2類(小形)
I類 (翼)						
II類 (横)						
III類 (縦)						
IV類 (不定)						

挿図出典：木村2003、木村剛朗さん追悼論集刊行会2009

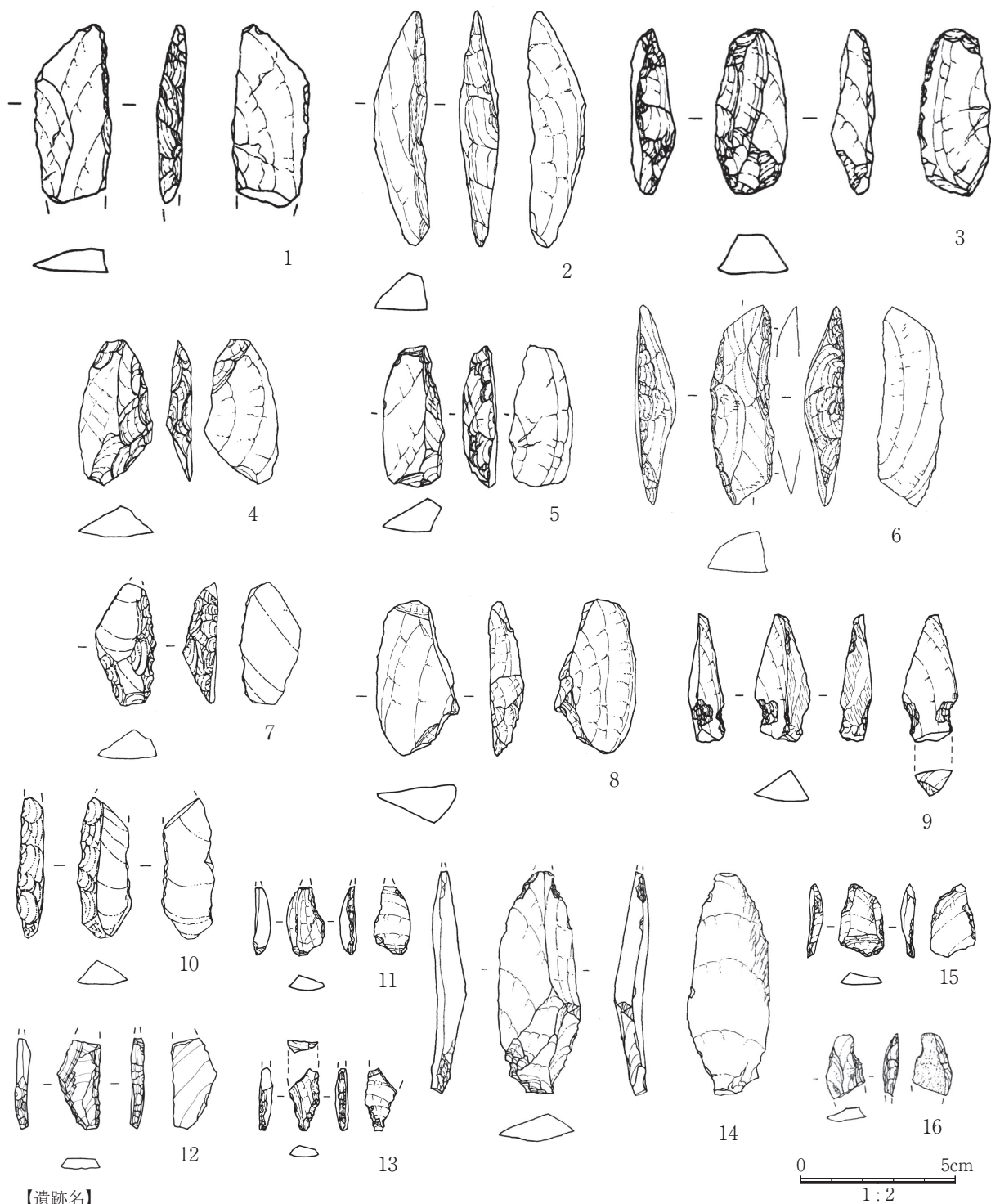
\*遺物：S=1/4

図2 西南四国におけるナイフ形石器の分類案



挿図出典：木村2003、木村剛朗さん追悼論集刊行会2009

図3 西南四国のナイフ形石器1



【遺跡名】

1～3. 平野茶園遺跡、4・5. 深泥遺跡、6. 和口西の駄場遺跡、7. 楠山遺跡、8. 大野平遺跡、9. 江川中畝遺跡  
 10. ナシケ森遺跡第2地点、11・13・15. 沖遺跡、12. 中駄場遺跡第III層、14. 下家地遺跡、16. 興野々遺跡

【分類】

1・2. 第IIa1類、3～5. 第IIa2類、6. 第IIb1類、7. 第IIb2類、8. 第IIc1類、9. 第IIc2類、10. 第IIIa1類、11. 第IIIa2類  
 12. 第IIIb1類、13. 第IIIb2類、14. 第IIIc1類、15. 第IIIc2類、16. 第IVc2類

挿図出典：木村2003、木村剛朗さん追悼論集刊行会2009

図4 西南四国のナイフ形石器2



のバリエーションのみで4点である。

これらのナイフ形石器をみると、概して述べればI類ナイフ形石器が最も多い状況であるが、詳細に見ればI類ナイフ形石器には部分加工によるc類と小形の2類が存在しないことも特徴的であろう。II類ナイフ形石器は一側縁加工のもの(IIa類)が多く、二側縁加工や部分加工のものは比較的少数となる。また、IIa類ナイフ形石器の中では大形品(IIa1類)が目立つようである。III類ナイフ形石器はc類が少数で、IV類ナイフ形石器はバリエーションを持たないと考えて良いだろう。

ナイフ形石器の形態において特徴的なのは、I・IV類ナイフ形石器にはバリエーションが少なく、II・III類ナイフ形石器にはそれが多くなるという傾向であろう。ただし、I類ナイフ形石器の多くはIa1類ナイフ形石器であり、これは瀬戸内技法による国府型ナイフ形石器の典型的なものである。Ib1類ナイフ形石器が192点中4点であることを考えれば、西南四国におけるI類ナイフ形石器の主体は一側縁加工による国府型ナイフ形石器であるといえよう。また、ここでの注意点は国府型ナイフ形石器として位置づけられるI類ナイフ形石器の多くは和口西の駄場遺跡のもので(167点)、平野茶園遺跡で12点、新裏口遺跡で3点、その他7遺跡で1点ずつの確認数である。また、西南四国の旧石器時代遺跡43ヶ所のうち、12遺跡において瀬戸内技法が確認されていることになるが、このうち翼状剥片あるいは翼状剥片石核のみが確認された遺跡は5ヶ所である。瀬戸内技法関連資料が認められる遺跡は全体比で見れば約27%であり、本地域において大部分を占めるものではない。

II類ナイフ形石器は43遺跡中18遺跡(約40%)で確認されており、この内I・III類ナイフ形石器とともに確認されている遺跡は11遺跡である。つまり、7遺跡で横長剥片素材のナイフ形石器のみの組成が考えられることになる。

III類ナイフ形石器は15遺跡で確認されるが、このうち7遺跡がIII類ナイフ形石器単独、その他の8遺跡がI・II類ナイフ形石器とともに確認されている。ただし、I類ナイフ形石器とともに確認される遺跡は2遺跡、II類ナイフ形石器とともに確認される遺跡は6遺跡であり、数字上ではII類ナイフ形石器との結びつきが想定されるようだ。

IV類ナイフ形石器は2遺跡のみの確認である。和口西の駄場遺跡と興野々遺跡で認められており、両遺跡ともにI～III類ナイフ形石器が確認されていることから、組成上の偏りを示す状況ではない。また、そのバリエーションも少なく、IVc2類ナイフ形石器のみである。

以上のように、西南四国で確認されるナイフ形石器327点を4分類15細分に整理することができた。これら各類の大きな時間的変遷については、本地域で組成や出土層位の明確なものは少なく、良好な石器群の出土をみる西日本の各地で実践されている編年観を参考とする必要がある。これは推察の域を出ないものではあるが、西南四国で確認される石器群が西日本全域のそれと比較した時に大きな隔たりがないことから、周辺地域の編年を援用することには大筋で問題はない。概して整理するならば、I・II類(瀬戸内技法・横長剥片素材)→III・IV類(縦長・不定形剥片素材)の変遷を想定できるだろう。



## 角錐状石器

角錐状石器は西南四国で7遺跡13点を数える(門脇ほか2001、木村2003、木村剛朗さん追悼論集刊行会2009、松村・山崎2000、森田1995、山口1990)。角錐状石器についてもナイフ形石器と同様にバリエーションが認められており、ここでは以前に筆者が行った分類案にしたがって説明する(図5、多田1997)。

まず周縁加工で大形の第I類A角錐状石器は、興野々遺跡、楠山遺跡、双海中駄場遺跡で各1点ずつ、同様に周縁加工で小形の第I類B角錐状石器は和口西の駄場遺跡で1点確認できる。2面加工で大形の第III類A角錐状石器は和口西の駄場遺跡で2点、ナシヶ森遺跡第2地点で1点、双海本駄場遺跡で1点、3面加工で大形の第IV類A角錐状石器は和口西の駄場遺跡で2点、双海中駄場遺跡で1点、池田遺跡で1点確認できる。なお、和口西の駄場遺跡では分類不明が1点ある。

分類別では第IV類A・第III類A角錐状石器が4点、第I類A角錐状石器が3点、第I類B角錐状石器が1点となり、遺跡別では和口西の駄場遺跡が6点、双海中駄場遺跡が2点、興野々遺跡、楠山遺跡、ナシヶ森遺跡第2地点、双海本駄場遺跡、池田遺跡が各1点である。

なお、角錐状石器の編年観については、以前に筆者は2時期に分かれる可能性を示したことがある(多田1997)。それは法量による時期差を想定したもので、大形から小形への時間的な変遷である。ちなみに西南四国に隣接する宮崎県域の編年観では、第5段階から第6段階の角錐状石器について、大形から小形への変化を考えている(宮崎県旧石器文化談話会2005)。また、藤野次史氏も瀬戸内海地域における編年を提示するなかで、藤野編年第IIIb期における角錐状石器の大形から小形への可能性を示唆している(藤野2006)。これらから考えれば、本地域でもその考えを援用できる可能性はあるが、西南四国の角錐状石器を見た時、小形のものには和口西の駄場遺跡における第I類B角錐状石器1点である。したがって本稿では、大形から小形への基本的な考えは維持するとしても、直ちに編年上の指標として扱うことはせず、ナイフ形石器の項で述べたI・II類ナイフ形石器(瀬戸内技法・横長剥片素材)→III・IV類ナイフ形石器(縦長・不定形剥片素材)への変遷のうち、その古相に対比させておくこととしたい。

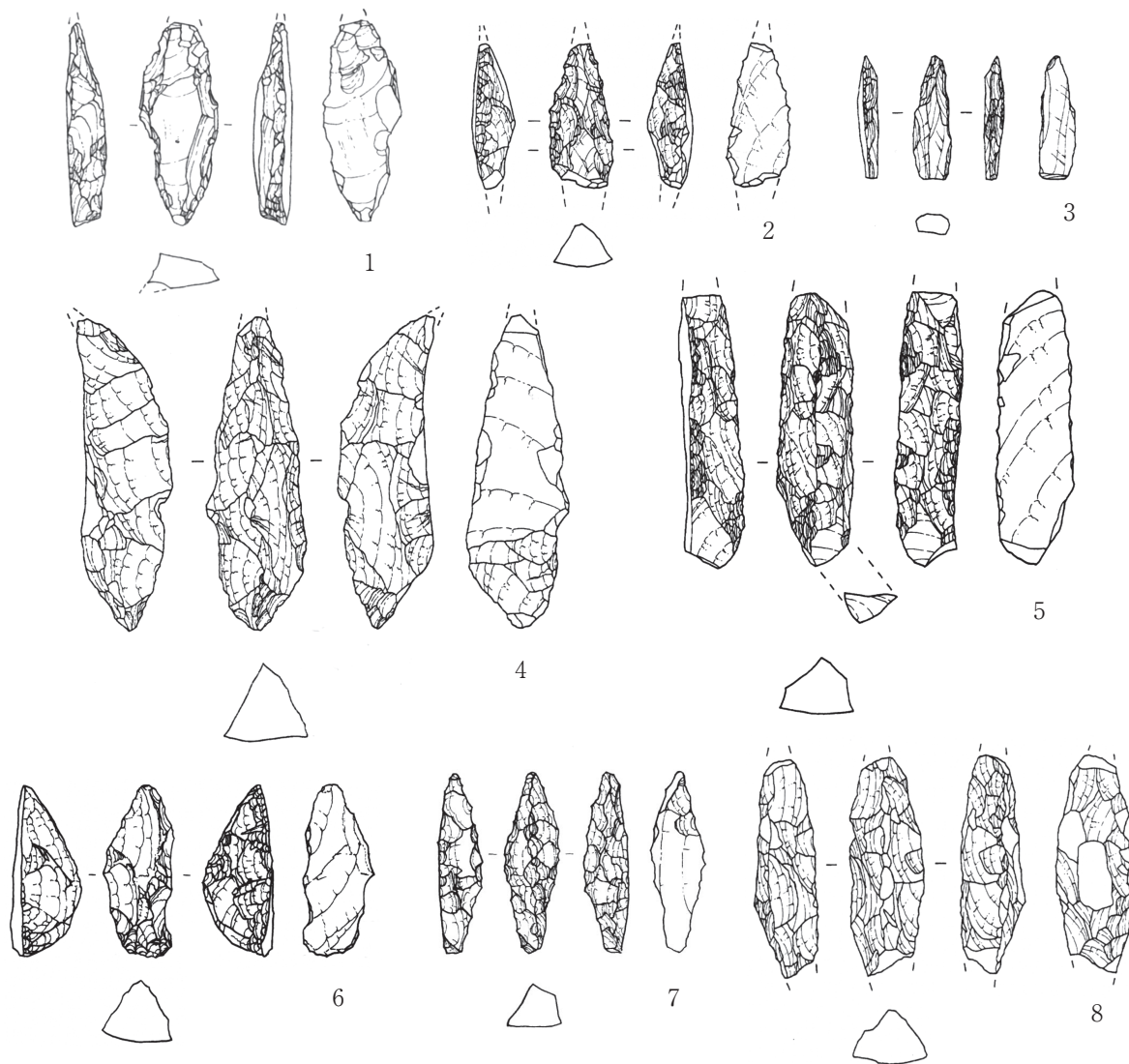
## 細石刃核

細石刃核およびブランクは8遺跡11点が確認されている。内容は野岳・休場型細石刃核が興野々遺跡で1点、広見遺跡で1点、船野型細石刃核およびそのブランクが池の岡遺跡A地点で1点、双海中駄場遺跡で3点、深泥遺跡で1点、上下田型細石刃核およびブランクが平野茶園遺跡で1点、ナシヶ森遺跡第2地点で1点、羽佐島I型細石刃核が広井駄場遺跡で1点、羽佐島II型細石刃核が平野茶園遺跡で1点確認できる。遺跡別では双海中駄場遺跡が船野型細石刃核3点で最も多く(ブランク含む)、他の遺跡は1～2点を数えるのみである。また、細石刃生産に関連する資料として、ナシヶ森遺跡第1地点では野岳・休場技法による打面再生剥片1点、池の岡遺跡では船野技法による作業面再生剥片2点が確認されている。

これら細石刃核および関連資料から考えられる細石刃生産技術には、野岳・休場技法、船野技法、羽佐島技法があり、西南四国では船野技法関連資料が5遺跡9点、野岳・休場技法関連資料が3遺跡3点、羽佐島技法関連資料が2遺跡2点となる。現状では船野技法によるものが多く、こ

分類	第I類A	第I類B	第II類A	第II類B	第III類A	第III類B	第IV類A	第IV類B
加工	周縁加工	周縁加工	周縁及び裏面	周縁及び裏面	2面加工	2面加工	3面加工	3面加工
サイズ	大形	小形	大形	小形	大形	小形	大形	小形
断面形	台形	台形	台形	台形	三角形	三角形	三角形	三角形
平面形								

図5 角錐状石器の分類(多田1997)



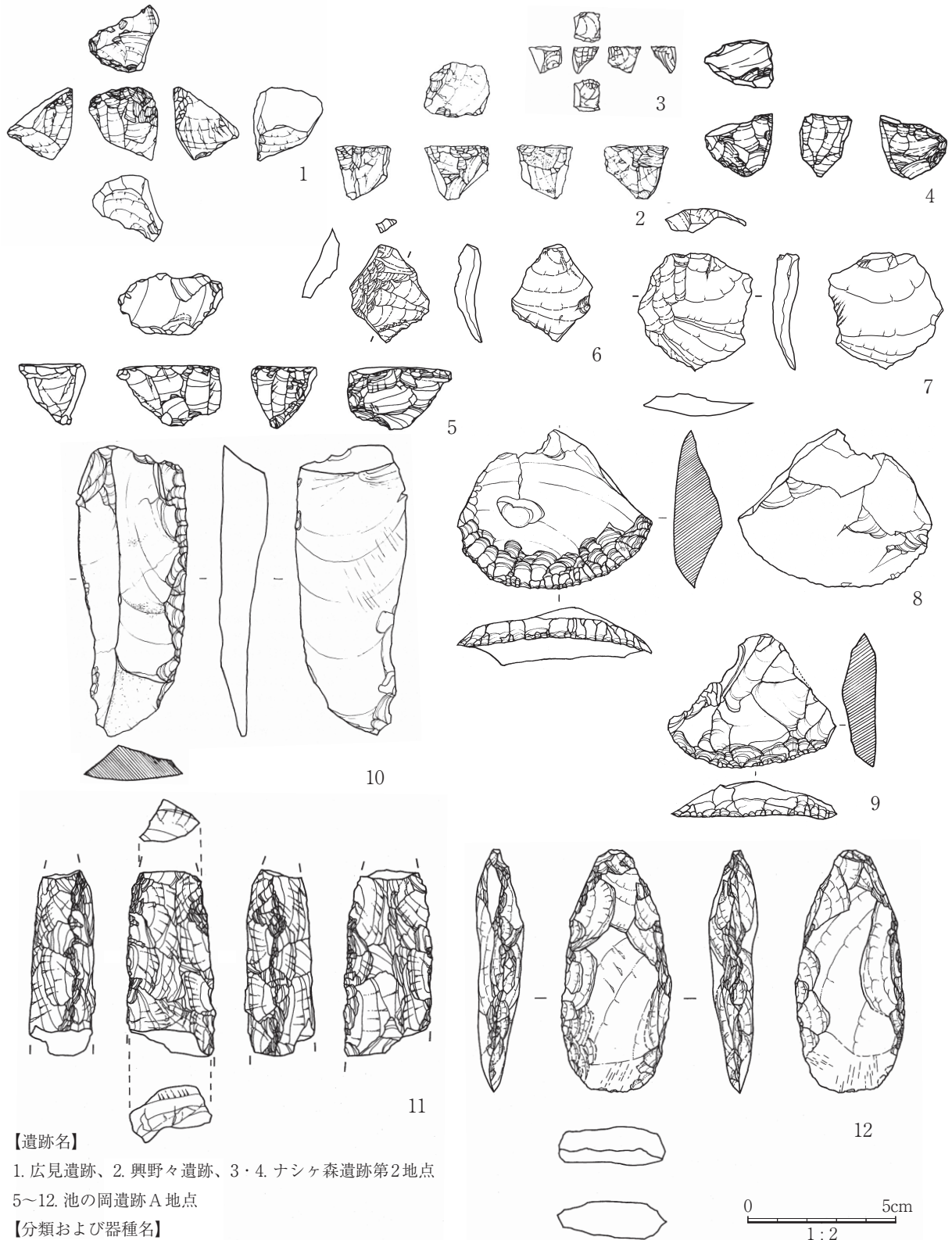
【遺跡名】1. 興野々遺跡、2. 双海中駄場遺跡、3~5・7・8. 和口西の駄場遺跡、6. ナシケ森遺跡

【分類】1・2. 第I類A、3. 第I類B、4~7. 第III類A、8. 第IV類A

0 5cm  
1:2

挿図出典：木村2003、木村剛朗さん追悼論集刊行会2009

図6 西南四国の角錐状石器



【遺跡名】

1. 広見遺跡、2. 興野々遺跡、3・4. ナシヶ森遺跡第2地点  
5~12. 池の岡遺跡A地点

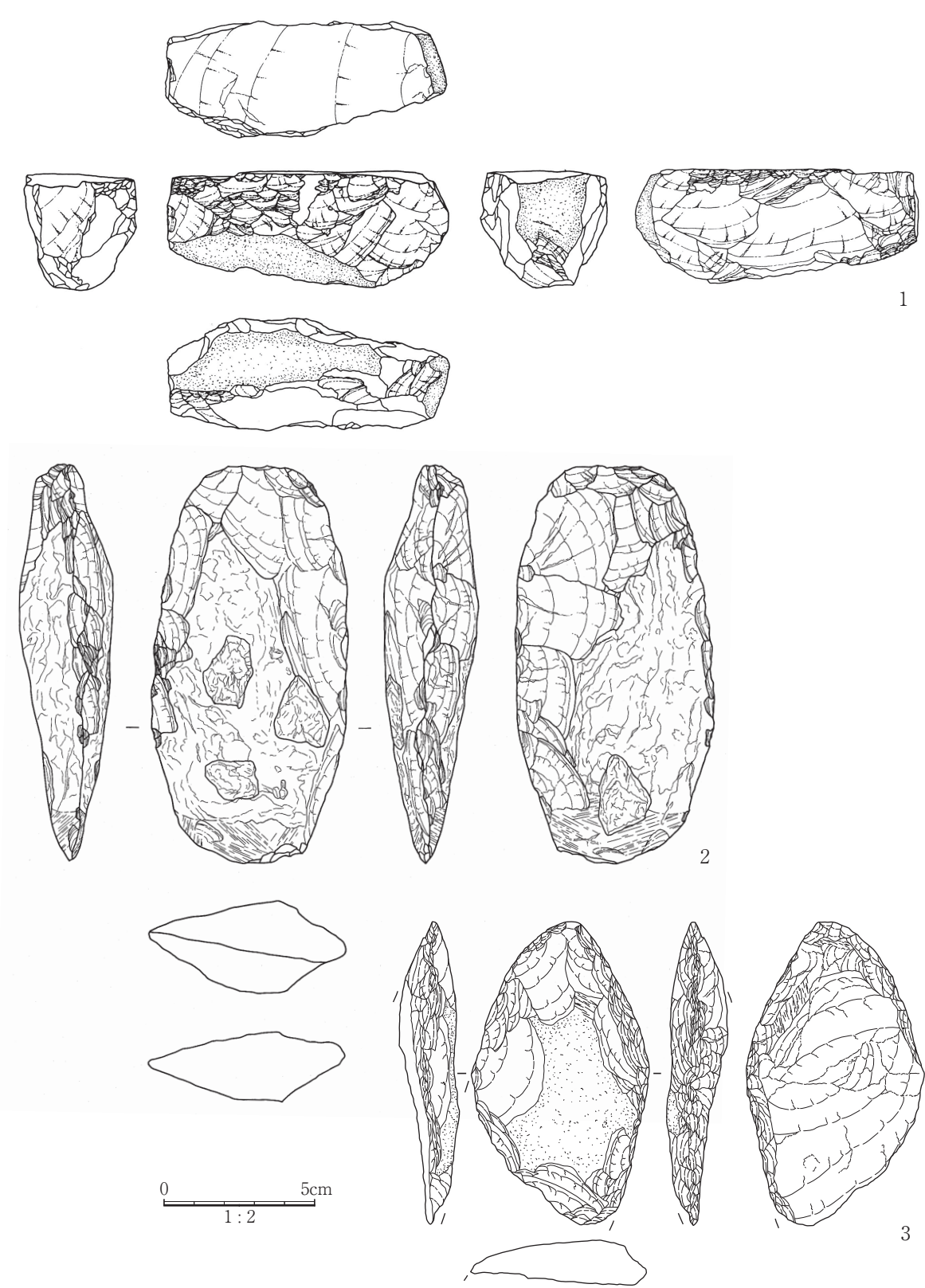
【分類および器種名】

1・2. 野岳・休場型細石刃核、3. 打面再生剥片（野岳・休場技法）、  
4. 上下田型細石刃核、5. 船野型細石刃核、6・7. 作業面再生剥片（船野技法）  
8~10. スクレイパー、11. 尖頭器、12. 石斧

挿図出典：門脇ほか2001、木村2003、多田1995・2014

図7 西南四国の細石刃核と関連資料1



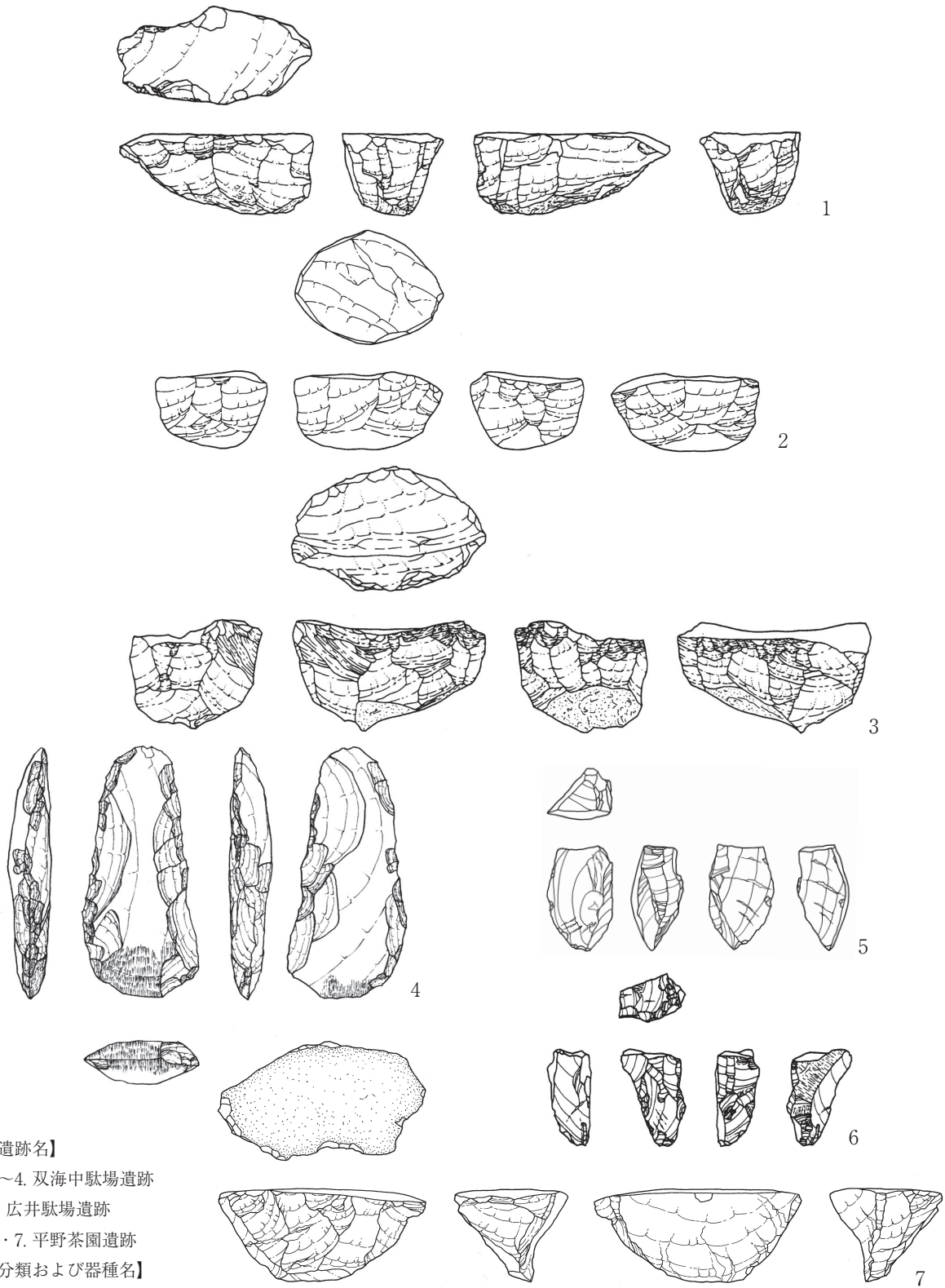


【遺跡名】1～3. 深泥遺跡

【分類および器種名】1. ブランク（船野技法）、2・3. 石斧

挿図出典：多田1995・2000・2015

図8 西南四国の細石刃核と関連資料2



【遺跡名】

1~4. 双海中駄場遺跡

5. 広井駄場遺跡

6・7. 平野茶園遺跡

【分類および器種名】

1. 船野型細石刃核

2・3・7. ブランク (船野技法)

4. 石斧、5. 羽佐島I型細石刃核、6. 羽佐島II型細石刃核

挿図出典：木村2003、木村剛朗さん追悼論集刊行会2009

図9 西南四国の細石刃核と関連資料3

れに野岳・休場技法と羽佐島技法が次ぐ状況であり、隣接する東九州では船野技法および野岳・休場技法が主体となる石器群が卓越すること、高知平野に位置する奥谷南遺跡で船野技法と野岳・休場技法による石器群が確認されていることを考えれば、東西両地域の様相に類似したものと判断できる。

さらにこの段階では尖頭器および石斧が伴うようである。筆者は愛媛県中・西部の石斧と尖頭器を整理し、一部については時期的に細石刃石器群の終末に併行する段階があることを考えたことがある(多田2000a・2002・2003a・2008a・b・2015)。尖頭器には池の岡遺跡A地点、中駄場遺跡、池ノ上遺跡、鳥打場の下遺跡、下益野B遺跡があり(木村1979・1995、森田1995)、尖頭器の形態は木葉形のもので主体であるが、池の岡遺跡A地点の場合は両側縁の並行する長身なものと考えられる。

石斧には真土遺跡、野尻遺跡、カルモカ遺跡、大奈路遺跡、池の岡遺跡A地点、深泥遺跡、双海中駄場遺跡がある(犬飼1982、木村1987・1995・2003、十亀1979)。これらの遺跡では池の岡遺跡A地点、深泥遺跡、双海中駄場遺跡のように船野技法による細石刃核が確認されている遺跡があり、これらの共伴が考えられれば、東九州および紀伊半島の遺跡と同じ様相であると判断できる(橘・多田2013ほか)。石斧の形態は短冊形または撥形の平面形となるもので、法量は大形から小形までが認められる。

以上のことから、細石刃核からは3つの細石刃生産技術が考えられ、さらに尖頭器と石斧が伴う可能性も考えられた。この点から細石刃石器群が確認される遺跡の所属時期を考えると、まずは野岳・休場型細石刃核と船野型細石刃核が古くからその終末まで存在したと考えて良いだろう。さらに船野技法による細石刃核には石斧と尖頭器が伴うと考えられる石器群があることから、細石刃出現段階から土器の出現する直前までの時期を想定できる(多田2011、橘・多田2013)。また、船野型細石刃核にはいくつかのバリエーションが考えられているが、隣接する東九州の事例からみれば、船野型細石刃核の単純期から上下田型細石刃核が加わる段階への変遷を考えておきたい(多田2000b・2011)。羽佐島技法は細石刃石器群段階において通時的なものと判断できるが、この技術が多く認められる備讃瀬戸での分析では、羽佐島I・II型細石刃核を通時的に、羽佐島III型細石刃核を新相に位置づけることを考えた(多田2001)。しかし、東九州における羽佐島技法の様相をみると、すべての型式が比較的新相に位置づけられる可能性は高い(多田2003b)。つまり、西南四国の細石刃石器群は東九州に類似した様相であり、石器群の階梯も類似することが想定されることから、西南四国における羽佐島技法の出現が比較的新相になる可能性を考慮しておきたい。

#### 4 剥片剥離技術

後期旧石器時代における剥片剥離技術については、表面採集による資料が多いために不明な点はあるが、遺物包含層とともに確認された事例が僅かにあるほか、和口西の駄場遺跡では石核80点が確認されており、当時における剥片剥離技術の様相は把握できるものと思われる。本章では遺物包含層が確認され、後期旧石器時代に所属することが明確である事例と、表面採集の場合



でも、その状況から判断して後期旧石器時代に所属する可能性が高い事例についてその様相を振り返ってみる。

中駄場遺跡第III層では不定形剥片石核と縦長剥片石核が1点ずつ出土している。両者ともに頁岩製のもので、不定形剥片石核の場合は分割礫を素材としてやや小振りな不定形剥片を作出している。縦長剥片石核は剥片を素材としたもので、その小口付近に小振りな縦長剥片を作出していることがわかる。さらにこの文化層では剥片29点が伴っているが、多くはやや横長となる不定形剥片で、その法量は最大長・最大幅が約4cmのものが主体となるようである。さらに、縦長・横長剥片を連続的に剥離したと考えられるものが存在しているほか、単剥離打面をもつ剥片も多いようである。

影平遺跡C地点第1文化層では、交互剥離による頁岩製の不定形剥片石核1点が確認されている。これは剥片を素材としており、表裏両面には交互剥離による剥片剥離痕が残されている。また、同一包含層の剥片には、この石核と同じ技術によると思われる剥片も出土している(橋1992の第11図12ほか)。

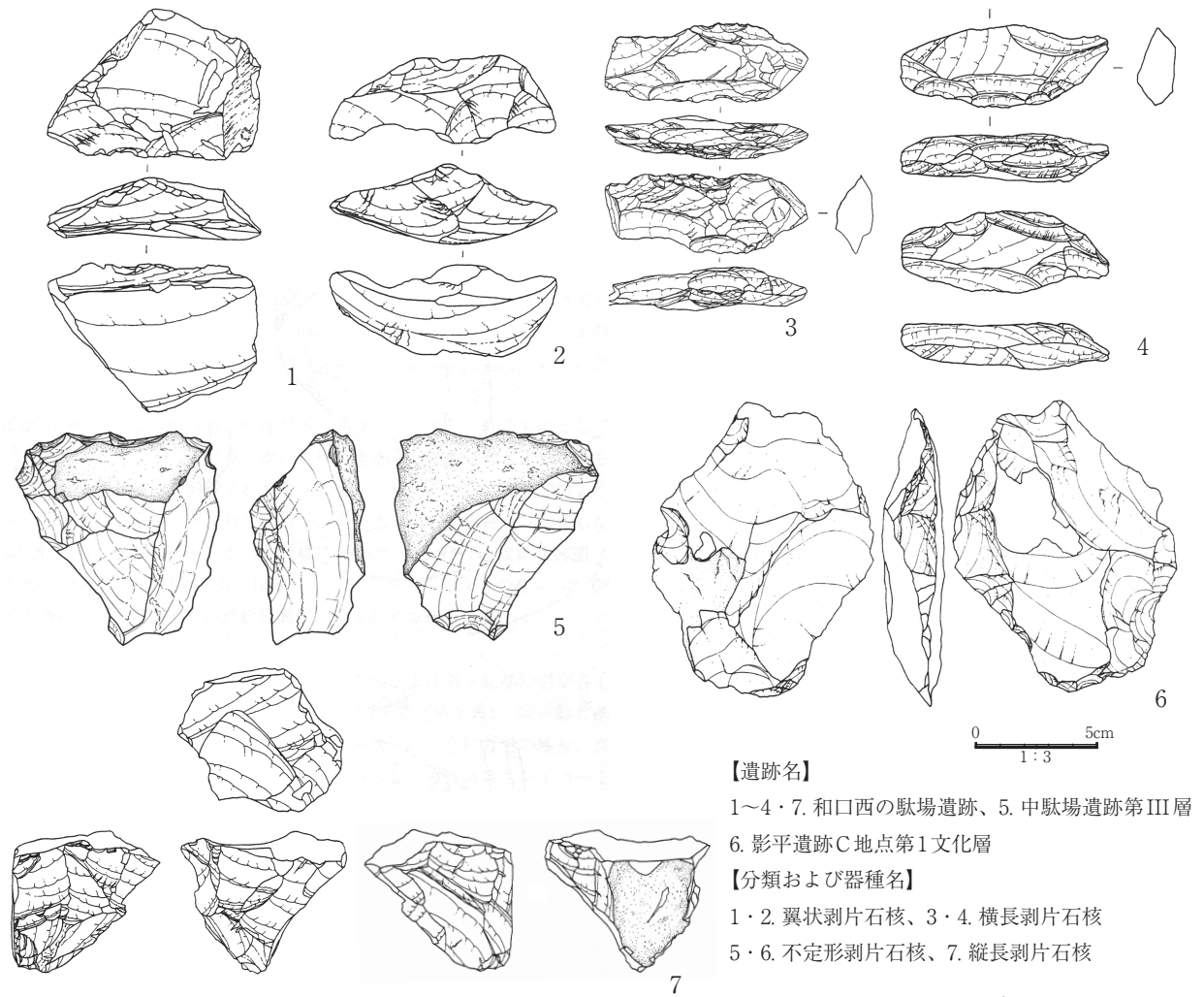


図10 西南四国の剥片石核

池の岡遺跡第I文化層では、頁岩製の使用痕剥片とスクレイパーが1点ずつ確認されているが、これらを見ると、両設打面による剥片剥離技術と、やや縦長となる不定形剥片剥離技術の存在を考察することができる。また、2点ともに単剥離打面を持つ。

和口西の駄場遺跡では、これまでに80点の石核が確認されており、その内容は瀬戸内技法による翼状剥片石核、交互剥離による横長および不定形剥片石核、縦長剥片石核がある。内訳をみると、翼状剥片石核が51点(64%)、交互剥離による石核26点(33%)、縦長剥片石核3点(3%)となり、瀬戸内技法が約半数を占めながらも交互剥離による横長・不定形剥片の生産も一定量認められるようである。参考までに、和口西の駄場遺跡におけるナイフ形石器を分類別に確認してみると、I類ナイフ形石器(=瀬戸内技法)が170点(70%)、II類ナイフ形石器(=横長剥片石核)が58点(24%)、III類ナイフ形石器(=縦長剥片石核)が11点(5%)、IV類ナイフ形石器(=不定形剥片石核)が3点(1%)で、点数上の比率からみればナイフ形石器と石核の点数比は似通っていると考えても良いだろう。なお、本遺跡で確認されている石核はすべて頁岩製である。

この他にも少数ではあるが双海中駄場遺跡では翼状剥片石核3点、横長剥片石核1点があるほか、留が奈路遺跡・ナシケ森遺跡第2地点・平野茶園遺跡で翼状剥片石核が各1点、興野々遺跡・大駄場遺跡で交互剥離による横長剥片石核が各1点、金毘羅遺跡で縦長剥片石核が1点確認されている。

概してみれば瀬戸内技法と横長剥片剥離が目立つようで、縦長剥片石核は非常に少ない確認点数となる。また、横長剥片石核には交互剥離によるものが大部分で、大形の剥片を素材としたものが主体となろう。

## 5 石材利用

西南四国における旧石器時代遺跡の多くで確認される石器石材は、在地で産出される頁岩であることは古くから知られている(木村2001、満塩・出原2000、森田2001)。この頁岩は、西南四国一帯で産出すると考えられるもので、地質学上ではホルンフェルスと呼ばれる石材も含まれている(永井・鹿島1975、永井・吉田1976)。この頁岩については詳細に分類すれば新たな知見が得られる可能性もあるが、岩石学的な論証を行っていないため、本稿ではこの名称を踏襲しておきたい<sup>4)</sup>。

主体となる頁岩の利用をみると、確認点数の多い和口西の駄場遺跡、双海中駄場遺跡、平野茶園遺跡、ナシケ森遺跡等ではこの石材が主体となっていることがわかる。このうち和口西の駄場遺跡とナシケ森遺跡については石材原産地に近接した遺跡である。和口西の駄場遺跡では遺跡の東側を流れる和口川とその上流域に良好な頁岩が産出しており、さらに上流域の表層地質にはホルンフェルスが分布する事も知られている(永井・鹿島1975、永井・吉田1976)。従来から頁岩と呼称しているものがホルンフェルスに共通するものであれば、和口西の駄場遺跡は原産地遺跡として位置づけることも可能となる。ナシケ森遺跡の石材については、発掘報告において珪質頁岩と呼ばれた淡褐色系の色調となる風化面をもつ石材である(門脇ほか2001)。ここでは調査地において同一石材の岩盤層が確認されており、原産地遺跡として位置づけられている。発掘調査に



においては遺物の出土量も非常に多く確認されているが、旧石器時代遺物は全体からすれば明確なものは少ない。旧石器時代においてこの地が主な石材原産地として利用されていたことは確定できないが、同質の石材は他の遺跡にも認められるようで、今後は同種石材の岩石学的検討も交えた論証が必要となろう。

他の事例から石材利用をみると、中駄場遺跡、池の岡遺跡、影平遺跡では、僅かに砂岩が含まれるようであるが主体となるのは頁岩である。これら3遺跡は愛媛県と高知県の県境付近に展開する御檜盆地に立地する遺跡であり、この盆地内を流れる松田川には良質な頁岩が産出している。これら遺跡の石材利用はこの環境が背景になっている。

ここで頁岩以外の石材利用をみると、頁岩を主体的に使用していることが確認される和口西の駄場遺跡には、赤色珪質岩製の角錐状石器1点が認められている(図6の3)。この角錐状石器の素材となった剥片を考えると、小形で交互剥離による横長剥片が利用されたと考えられ、製作技法や石材利用から考えれば西瀬戸内との関連も指摘できる。ちなみに西瀬戸内にある東峰遺跡第2地点では、西南四国で認められる頁岩を石材とした石核の存在がある(竹口・多田2002の第17図25)。この現象に関する論証は未だ明示されていないが、両地域間の回帰遊動を考える上でも興味深い現象であろう(沖野2013・2014)。

この他に興野々遺跡では、赤色珪質岩・サヌカイト製のナイフ形石器、サヌカイト製の角錐状石器、チャート製の細石刃核が確認されている。沖遺跡と影野地遺跡ではチャート製のナイフ形石器、ナシヶ森遺跡では黒曜石製の角錐状石器とチャート製の細石刃核、平野茶園遺跡ではチャート製の細石刃核がある。

以上の事例をあげても頁岩以外の利用は非常に僅かで、この現象に関する論証は現時点で困難だが、考えられる事象を述べるならば、赤色珪質岩やサヌカイトを含む興野々遺跡では、交互剥離による小形の石核も認められ、石材利用と考え合わせれば西瀬戸内との共通点が見出されるようである。また、チャート製のナイフ形石器が確認される沖遺跡をみると、3点確認されたナイフ形石器すべてがIII類ナイフ形石器であり、細分では小形(2類)となる。細石刃核についてはナシヶ森遺跡のチャート製細石刃核が上下田型細石刃核に、平野茶園遺跡のチャート製細石刃核が羽佐島II型細石刃核に分類され、現状では細石刃核の型式と石材に関連が想定されよう。

## 6 編年試案

### 第I期

西南四国ではこの段階の石器群は確認されていないが、他地域で始良Tn火山灰降灰期以前から出土する石器群のうち、ナイフ形石器が伴わない段階に符合する。中・四国地方では台形様石器、打製石斧等を伴う石器群が認められている(藤野2006)。西瀬戸内では東峰遺跡第4地点の下層石器群が知られており、ここでは台形様石器と打製石斧が伴っている(竹口・多田2002)。なお、この遺跡では火山灰分析が実施されており、石器群は始良Tn火山灰降灰層準の下位から出土している。また、隣接する東九州でもこの段階の石器群が認められており、本地域でも同様な石器群が存在することを想定しておく。

## 第IIa期

第I期と同じくこの段階の資料は確認されていないが、周辺の中国山地や東九州等では確認事例があることから、西南四国でも検出の可能性を考えて設定しておきたい。なお、この段階の石器群は始良Tn火山灰降灰層準の下位に出土層位をもち、石器組成についてはナイフ形石器を主体とすることが考えられる。

## 第IIb期

本地域では瀬戸内技法および横長剥片素材のナイフ形石器を中心とした石器群が主体となる時期で、角錐状石器もこの段階に出現する。本地域では池の岡遺跡第I文化層、興野々遺跡、和口西の駄場遺跡、双海中駄場遺跡、平野茶園遺跡等が該当する。ナイフ形石器にはI・II類ナイフ形石器が組成し、特に瀬戸内技法によるナイフ形石器が主体と考えられる。例えば和口西の駄場遺跡や平野茶園遺跡ではI類ナイフ形石器の確認事例は顕著で、これに横長剥片素材によるII類ナイフ形石器が伴うことが想定できよう。また、角錐状石器もこの段階に位置づけられると思われる、和口西の駄場遺跡や双海中駄場遺跡で確認することができる。基本的にこの段階では瀬戸内技法による国府型ナイフ形石器(I類)、横長剥片素材による一側縁加工のIIa類ナイフ形石器が主体となって、角錐状石器がこれに少数伴う状況を考えることができよう。なお、角錐状石器については前章で述べたように大形から小形への変遷も考慮しているが、現状では編年の指標として考えることは難しく、この課題は今後の資料増加に委ねることとしたい。

さらに池の岡遺跡第I文化層であるが、以前に筆者は、池の岡遺跡と中駄場遺跡の堆積層に関する比定作業を行っており、この文化層が始良Tn火山灰の降灰時期に近接した年代であることを考えた(多田1999)。現状では池の岡遺跡において火山灰分析が行われていないため出土層位と広域降下火山灰の直接的な関連は確定できないが、中駄場遺跡の成果によれば池の岡遺跡第I文化層の年代は上記した年代観と大きな差は持たないと考えられる。したがって、現状では第IIb期の石器群として位置づけるが、この時期の中でも比較的古相の石器群である可能性も考慮しておきたい。

時期	ナイフ形石器				角錐状石器		細石刃生産技術			主な遺跡
	I類	II類	III類	IV類	大形	小形	船野型	野岳・休場型	羽佐島I~III型	
第I期										
第IIa期							始良Tn火山灰降灰			
第IIb期	■	■			■	■				池の岡I 和口西の駄場 興野々 双海中駄場 平野茶園 新裏口
第III期	■	■	■	■						深泥 大駄場 楠山 影平C1 中駄場III 宇須々木 ナシヶ森2 梶郷駄場 大野平 影野地 沖
第IVa期							■	■	■	興野々 広見
第IVb期										平野茶園 広井駄場 ナシヶ森2
第IVc期										深泥 池の岡A 双海中駄場 真土 野尻 大奈路

図11 西南四国における後期旧石器時代の編年試案

### 第III期

縦長・横長・不定形剥片素材のナイフ形石器が主体になる段階である。特にこの時期の後半になってからは小形のナイフ形石器が主体となる可能性がある。周辺の編年観では瀬戸内技法が僅かに認められるようであり、その可能性も考慮しておきたい。また、角錐状石器はこの段階では伴わないものとしておく。この時期の遺跡には中駄場遺跡第III層、影平遺跡C地点第1文化層、深泥遺跡、大駄場遺跡、楠山遺跡、影野地遺跡、沖遺跡等が該当する。これらのうち、出土層位の明確なものは中駄場遺跡第III層と影平遺跡C地点第1文化層であるが、これらの石器組成をみると、中駄場遺跡第III層では横長剥片素材と縦長剥片素材のナイフ形石器があり、石核には不定形剥片と縦長の小形石核がある。影平遺跡C地点第1文化層は10ヶ所のトレンチで確認されており、使用痕のある剥片、二次加工のある剥片、横長・縦長剥片、横長剥片石核といった35点の出土遺物がある。ナイフ形石器等が伴っていないために時期認定は難しいが、ここでは先述した層位的根拠に基づき、中駄場遺跡第III層に並行するものと考えておきたい。なお、剥片や石核をみると、横長剥片を主体としながらも縦長剥片が認められていることから、この時期に所属するナイフ形石器が伴う可能性は高い。

この時期のナイフ形石器はII・III類ナイフ形石器を主体として、後半期にはIV類ナイフ形石器が少量存在すると思われ、さらには大形から小形への時間的変遷を想定することもできる。また、中駄場遺跡第III層や影平遺跡C地点第1文化層の石器類をみても確認できるように、瀬戸内技法と角錐状石器の存在は認めることができない。

以上のように、この時期におけるナイフ形石器は大形から小形への変遷が考えられるが、これを示唆する石器群としては沖遺跡がある。ここでは頁岩とチャートによるIIIa2・IIIb2・IIIc2類ナイフ形石器が採集されており、これ以外のナイフ形石器は確認できない。この事例から考えれば小形のナイフ形石器が主体となる石器群の存在を示唆できるだろう。

### 第IVa期

野岳・休場技法と船野技法を主体とする石器群が存在したと考えられ、東九州の事例から考えれば一遺跡においてこれら両者が伴う場合と単独で確認できる場合が想定される。この場合、船野技法による細石刃核は船野型細石刃核のみの組成を考えておきたい。野岳・休場型細石刃核が確認される遺跡には興野々遺跡や広見遺跡の例があげられるが、現状で船野型細石刃核が単独で存在したことを想定できる遺跡は無い。

### 第IVb期

船野技法による細石刃核のバリエーションが増加する時期である。この技法による船野型細石刃核と上下田型細石刃核が認められ、さらには羽佐島技法による羽佐島I～II型細石刃核も伴う。また、野岳・休場技法はこの時期でも継続されたと考えられる。西南四国ではこれらの細石刃生産技術が同時期に残された遺跡は確認されていないが、高知県奥谷南遺跡ではこれらの細石刃核が同一ブロック内で確認されており、同様な組成を示す石器群が残されていた可能性は高いと考えられる。西南四国では平野茶園遺跡、ナシヶ森遺跡第2地点、広井駄場遺跡がこの段階の遺跡と考えられる。

## 第IVc期

各技法の細石刃生産技術に伴い、尖頭器や石斧が組成に加わる段階である。この時期の遺跡としては、深泥遺跡、池の岡遺跡A地点、双海中駄場遺跡等を考えることができよう。尖頭器と石斧が伴う点については、東九州では比較的新相の時期にあると考えられており、本地域でもこれを援用して編年的位置づけの判断とした。この点からすれば、前述したように単独で確認される石斧についてもこの時期に帰属させることができ、真土遺跡、野尻遺跡、大奈路遺跡、カルモカ遺跡等がこれに該当しよう。

## 7 石器群の展開

西南四国における後期旧石器時代で、ナイフ形石器を主体とした石器群が存在する時期は本稿編年の第IIb～III期であり、第I～IIa期についてはその様相が明らかではなく、現状では将来にその発見を期待するほかない。また、前章でも述べたように西瀬戸内や九州ではこの時期に該当する石器群の出土があり、さらには第IIb期の石器群中でも、池の岡遺跡第I文化層のように比較的古相段階と考えられる石器群もある。これら事例からすれば、第I～IIa期に併行する石器群が存在する可能性は考慮できよう。

また、こうした古相の石器群検出に関連して、周辺における広域降下火山灰検出の動向にも注意しておく必要がある。旧石器時代に関係するものとして、古くから周知されている事例としては宿毛市における始良Tn火山灰(30～28ka)と小川テフラの検出がある(熊原・長岡2002、古環境研究所2001、早田1999、町田1996)。始良Tn火山灰については、中駄場遺跡、ナシヶ森遺跡、宿毛市小川で、さらに宿毛市小川・神有では小川テフラと呼称された九重第一テフラ(60ka)に比定される火山灰の検出がある。また、明確な降灰層準の特定には至っていないが、中駄場遺跡東露頭で阿蘇4火山灰起源(90～70ka)の可能性がある火山灰も確認されている。旧石器時代の発掘調査において、年代の指標となる広域降下火山灰(指標テフラ)の検出は重要な意味を持つ。石器群における年代観の明確な位置づけは、指標テフラとの関連を把握することも重要な作業の一つであり、石器群の有無にかかわらず、周辺地域における堆積環境の調査実績やデータの蓄積を重ねておく必要があるだろう。

西南四国で旧石器時代の遺物が確認できるのは第IIb期以降となる。第IIb期には瀬戸内技法を持つ石器群の存在が顕著で、西南四国一帯でそれが確認できる。また、瀬戸内技法を持つ石器群の遺跡立地を振り返ると、多くは海浜部に近接した距離にある。例えば和口西の駄場遺跡と大超寺奥遺跡の場合、現在の海岸線から約2～3km離れた場所にあり、御荘湾と宇和島湾に近接している状況である。また、平野茶園遺跡や双海中駄場遺跡、新裏口遺跡等は、四万十川下流域の海岸段丘上に立地しており海浜部から近距離にある。そして、これら海域は旧石器時代の段階には海水面低下によって広大な平原が形成されており、瀬戸内技法を伴う遺跡の多くはこうした平原を目前に控えた立地条件であったことになる。但し、僅かではあるが留が奈路遺跡のように石核1点が山間部で確認される事例もあり、瀬戸内技法による石器群のすべてにおいて一致する点ではないが、多くの瀬戸内技法を持つ集団が現在の海浜部付近を回帰遊動領域にしていた可能性は



高い。

こうした遺跡の立地条件は、近年の研究事例を参照すれば瀬戸内海沿岸地域に展開する瀬戸内技法集団との共通点であるともいえる。つまり、瀬戸内技法集団は移動性が高く、草原性動物狩猟に比重を置いた生活様式を具備していたと考えられており、そればかりではなく、和口西の駄場遺跡の周辺に産出する大量で良質な頁岩は、その集団の移住先として適した環境下にあったことが想定されている(森先2011・2013)。旧石器時代当時の地理環境からは、瀬戸内地域と同様な生活様式が西南四国の縁辺部においても可能であったと考えられ、本地域は森先氏が指摘するように瀬戸内技法集団の移住先であった可能性は高い。これを傍証する現象が、和口西の駄場遺跡における瀬戸内技法の「純粋な製作技術」や「瀬戸内技法すべての工程が残されている可能性」といった指摘であろう(氏家2004、木村2003)。

さらに瀬戸内技法を備えた石器群の中で注意しておきたいのは、大超寺奥遺跡第1地点で確認された石器群であろう。ここでは4点の旧石器時代遺物が確認されているが、Ia1類ナイフ形石器(国府型ナイフ形石器)1点と翼状剥片3点の組成である(木村2003)。この遺跡周辺には良質な頁岩が産出しており、さらに海浜部に近接した立地条件を考えれば、良質な頁岩と草原性動物を求めた瀬戸内技法集団の足跡とみることも可能である(木村2003)。これをふまえれば大超寺奥遺跡のように瀬戸内技法のみが確認されることも偶発的なものではなく、瀬戸内技法集団における大規模な移動性の高い生活様式の積極的な根拠になる。こうした現象は和口西の駄場遺跡や大超寺奥遺跡の内包する重要性を明示したのみでなく、西南四国における瀬戸内技法の存在を深く論証できるものとして高く評価できるだろう。

本稿編年の第IIIb期については、前述した瀬戸内技法を主体としながらも横長剥片素材のナイフ形石器(II類ナイフ形石器)や角錐状石器が存在すると考えられる。また、編年上でのクロスチェックを可能とする現象があるとすれば、西瀬戸内の遺跡である東峰遺跡第2地点で確認された石器であろう。これは遺物包含層にともなって確認された資料ではないが、赤色珪質岩が主体的に使用される石器群にある中で、1点のみではあるが頁岩製の瀬戸内技法による翼状剥片石核が存在している(竹口・多田2002の第17図25)。この石器に対しての石材分析は行われていないが、表面風化の色調から考えれば西南四国周辺で産出する頁岩に酷似している。この遺物を積極的に評価すれば、西南四国に伝播した瀬戸内技法を具備した集団が、さらに瀬戸内への回帰を遂げたとの解釈も可能となる。

また、興野々遺跡では普遍的な西南四国の石器群と異なる点を指摘できる。ここでは第IIIb期の遺物としてナイフ形石器9点と角錐状石器1点が確認されているが、安山岩、サヌカイト、赤色珪質岩等が使用石材に含まれている。この利用は西瀬戸内に類似した現象であると考えられ、ナイフ形石器の形態をみても西瀬戸内との関連を指摘できるようだ。これらすべての石器に共時性が伴うことは断言できないが、興野々遺跡における石器の様相は瀬戸内との接点を内包するものと考えておきたい。

そして、この段階には角錐状石器が石器装備に組み込まれているが、西南四国全域からみれば非常に少数である。西南四国では43遺跡中7遺跡で13点の角錐状石器が確認されているが、最

も多く確認されているのは和口西の駄場遺跡の6点である。その他の遺跡では1～2点の確認事例であり、和口西の駄場遺跡の確認数は目立つ現象である。和口西の駄場遺跡における角錐状石器には、第III類A・IV類A角錐状石器と第I類B角錐状石器が組成しているが、このうち第I類B角錐状石器は赤色珪質岩製である。この石材利用は西瀬戸に類似する現象で、先述した東峰遺跡第2地点における翼状剥片石核の搬入と同様に、西瀬戸内と西南四国の接点を見出させる事実であろう。

なお、角錐状石器については前章でも述べたように大形から小形への変遷を考えているが、本地域にあっては具体的な根拠を欠いている。この点については今後の類例増加に頼るしかないが、先に述べたように角錐状石器は瀬戸内からの搬入が考えられる事例もあり、さらにはその階梯をも同じくすることが想定できる。この仮説が成立すれば大形から小形への時間的変化が考えられるが、現状では可能性を述べるのみに留めておきたい。

第III期になると横長剥片剥離技術が引き継がれながらも、縦長剥片および不定形剥片の生産や、ナイフ形石器の小形化および多様化、頁岩以外の石材利用が目立つようになる。瀬戸内技法は周辺の事例を考えあわせれば消滅するか僅かに残る状況であろう。これらの現象は中駄場遺跡第III層における剥片剥離技術とナイフ形石器の形態、沖遺跡と深泥遺跡における小形ナイフ形石器の存在、沖遺跡におけるチャートの利用で説明が可能である。これらは後期旧跡時代の中でも比較的新しい要素として位置づけられるようで、前述の変化は第III期の特徴と考えておきたい。

剥片剥離技術をみると、第IIIb期から瀬戸内技法とともに存在していた横長剥片剥離技術がそのまま継承されている。そして、瀬戸内技法が消滅または減少したであろう第III期は、本地域における横長剥片剥離技術の伝統を継承し、新たに縦長剥片剥離技術を採用したことによる、大小のナイフ形石器の製作によって特徴付けられる。同時にこの現象は、ナイフ形石器のバリエーションを増加させたことにも連動したと考えられよう。この変化は中駄場遺跡第III層で垣間見ることができ、例えば横長剥片素材によるナイフ形石器を保持しながらも、縦長剥片素材による二側縁加工のナイフ形石器の製作、さらに不定形剥片石核や小形な縦長剥片石核の存在は、剥片剥離技術のバリエーションが増加したことを示すものであろう。また、同時期と考えられる影平遺跡C地点第1文化層では、横長・縦長・不定形剥片や、横長・不定形剥片石核等が確認されており、やはり剥片剥離技術におけるバリエーションの多さが考えられる。

また、新相の時期に至るナイフ形石器の小形化現象を積極的に評価すれば、深泥遺跡と沖遺跡がその解釈を得るための指標となる。深泥遺跡における第III期の石器にはナイフ形石器が4点あり、このうち3点は小形(2類)なものである(図4の4・5)。これらはすべて横長剥片を素材としたもので、在地の頁岩を使用石材としている。沖遺跡では3点のナイフ形石器が確認されており、これらはすべて小形(2類)なもので石材利用はチャート2点、頁岩1点である(図4の11・13・15)。これら2遺跡から注意できることは、横長剥片を素材としたものと縦長剥片を素材としたものがあり、横長剥片素材のものは頁岩、縦長剥片素材のものにはチャートが使用されていることであろう。

これら2遺跡から考えられることは、一つには伝統的な横長剥片剥離技術を継承しながらも小形ナイフ形石器を必要としたこと、さらに横長剥片剥離以外の手法で小形の素材を得て小形ナイフ形石器を製作したことであり、同時に使用石材については頁岩以外での対応を想起できる。伝統的な横長剥片生産は決して消滅することはないが、縦長・不定形剥片剥離技術や異種石材の採用、さらに大小の作り分けによってナイフ形石器の多様化を実現したと考えられよう。

第IV期は細石刃石器群が存在する段階で、本稿では3時期に小区分している。本地域で特徴的なのは船野技法による細石刃石器群の存在であろう。船野系細石刃石器群関連資料は全資料中の約7割を占めており、本地域の細石刃生産技術が東九州において普遍的に確認されるものに共通しているといえよう(橘・多田2013)。さらに東九州で船野技法が確認される遺跡には尖頭器や石斧が伴う場合もあり、石器組成についても東九州との共通点を見出すことができる。さらに、池の岡遺跡では単剥離打面を広く残す特徴的なスクレイパーがあり、この形態的特徴からは東九州の事例に類似している事がわかる(図7の8～10)<sup>5)</sup>。

また、西南四国から東方では、高知平野周辺と紀伊水道沿岸で船野系細石刃石器群が伴う遺跡が知られている。まず、高知平野に位置する奥谷南遺跡では船野型細石刃核、上下田型細石刃核、野岳・休場型細石刃核、羽佐島I・II型細石刃核が確認されている(松村ほか2001)。石材は主にチャートが使用されているが、船野技法による細石刃核には西南四国産出の頁岩と考えられるものが含まれている。これら細石刃石器群に伴う特徴的な石器は、その出土状況から判断できるものはないが、同一層準から出土している一部の尖頭器や、細石刃石器群の包含層から遊離して出土している石斧は、積極的に見て細石刃石器群に伴う可能性が高いだろう(多田2008aの第2図1)。

紀伊水道沿岸では和歌山県壁川崎遺跡と平池北岸遺跡で、船野技法による細石刃核が知られている(中原1981・1998)。両遺跡ともに表面採集によって得られた資料であるが、これら遺跡では船野型細石刃核が確認されており、平池北岸遺跡ではサヌカイト、壁川崎遺跡では在地産出の頁岩が使用されている。また、壁川崎遺跡では尖頭器も採集されており、これは細石刃核と同じ在地産出の頁岩が使用石材となっている(和歌山市立博物館2010)。この尖頭器と船野型細石刃核の共時性は慎重に位置づける必要はあるが、先述した東九州や高知平野周辺の遺跡と同様に、尖頭器が関連する可能性を見出せることには注意しておきたい。

以上、西南四国周辺の細石刃石器群をみると、東九州、高知平野、紀伊水道沿岸と似かよった状況であり、船野系細石刃石器群が太平洋沿岸に分布する傾向は指摘することができる。また、船野系細石刃石器群は東海地方から南関東まで確認され、太平洋沿岸一帯に広く伝播したことを想定でき、西南四国に残された船野系細石刃石器群はそうした痕跡の一つであると理解できよう(橘・多田2013)。

ここで細石刃石器群の段階について整理しておくとして、西南四国における細石刃生産の開始は船野技法と野岳・休場技法の両者を持ち得た集団の流入が契機であり、これは九州からの直接的なものであったと考えられる(第IVa期)。また、船野系細石刃石器群の石材利用をみると、九州では黒曜石、流紋岩、砂岩等が用いられているようであるが、近隣の東九州では流紋岩を多用する傾向にある。西南四国における船野系細石刃石器群の関連資料は、ナシケ森遺跡第2地点のチャー



ト製となる上下田型細石刃核1点を除けば、他はすべて在地産出の頁岩である。西南四国における頁岩利用と東九州における流紋岩利用を考えた時、そこにはやはり当時の細石刃製作者たちが同質の石材を求めたことを想定できる。これら両地域の石材は風化面の色調や質感に差を見出すことはできるが、風化していない剥離面は酷似している。こうした石材の選択によって船野技法の存続が維持され、さらにいえば西南四国が頁岩産出地帯であったことが、船野技法の伝播と継承を実現したと考えられよう。

第IVb期では船野技法による細石刃核のバリエーションが増加し、上下田型細石刃核が加わるほか、羽佐島技法による細石刃核も流入すると考えられる。野岳・休場技法についても、東九州の状況をふまえればこれも引き続き残されていた可能性は高い。第IVc期になって尖頭器や石斧が組成すると思われ、東九州とはほぼ同じ石器組成となる。また、第IVb期以降には船野技法が東へ伝播し、その痕跡を奥谷南遺跡と壁川崎遺跡でみることができよう。

### おわりに

西南四国における後期旧石器時代後半期の石器群は、確認事例の多くが表面採集によるもので、特に編年を考えるにあたっては不安要素も多い。しかし、確認される遺跡数と遺物量は四国内においても比較的多い地域であり、瀬戸内や九州との接点を論証できる資料を認めることができる良好な研究フィールドである。

ここで本地域における旧石器時代の特質または時代背景について簡単にまとめてみると、第一には後期旧石器時代における瀬戸内技法の流入であろう。かつて瀬戸内海に存在した広大な平原を背景とし、草索性動物の獲得を生活様式に取り込んだ瀬戸内技法集団は、類似した自然環境にあった西南四国の平原地帯にその痕跡を残したことになった。さらには大量で良質な石材を必要とする瀬戸内技法を継承する上でも、西南四国の石材は良好な資源であったと考えられる。そして、瀬戸内技法は西南四国内でもより石材確保が保証された御荘湾周辺を発信地として西南四国へ拡散したと思われ、当時は平原地帯であった地域にその足跡を残したものと考えられよう。

瀬戸内技法はやがて衰退するが、横長剥片剥離技術はその後も引き続き採用され、さらに縦長・不定形剥片剥離技術による多様なナイフ形石器を維持するようである。つまり、瀬戸内技法以外の剥片剥離技術が残されることになるが、特に横長剥片剥離技術は本地域の伝統的な剥片生産として位置づけることができよう。

旧石器時代の終末に位置づけられる細石刃石器群は、その多くが船野技法によるものであり、これに野岳・休場技法や羽佐島技法が僅かに伴う状況である。そして、船野系細石刃石器群は東九州から直接的に伝播したのと考えられ、これは頁岩利用や石器組成の面からも論証できる。西南四国に到達した船野技法は、ここからさらに東方の高知平野、紀伊水道沿岸、東海、南関東へと伝播し、西南日本における船野系細石刃石器群の文化圏を形成したことになった。西南四国は船野技法が拡散する上での出発地であり、さらには船野技法を西南日本に広めた役割を果たしたといえよう。

本稿の作成にあたっては下記の方々にご協力を得た。ここに記して感謝申し上げたい。



(2015年3月31日)

## 註

- 1) 猪石氏による遺跡分布図と編年案は、既に1979年発刊の『一本松町史』に掲載されている(一本松町史編集委員会1979)。この編年案は本地域の研究において初めての試みであった。その後、氏による編年の修正案は提示されていないが、1994年に刊行された茶堂Ⅱ遺跡の調査報告中に詳細な遺跡分布図が改めて提示されている(一本松町教育委員会1994)。
- 2) 「和口西の駄場遺跡」とは従来から呼称されている「和口遺跡」のことを指す。この遺跡名称は愛媛県南宇和郡愛南町教育委員会作成の「埋蔵文化財包蔵地調査カード」と、愛媛県教育委員会2000『愛媛県埋蔵文化財包蔵地一覧』において使用されており、本稿でもこの遺跡名称に従うこととした。
- 3) 四国における尖頭器については四国1～4群に分けることができ、細石刃石器群に伴うと考えられるのは四国2群である(多田2002)。なお、西南四国において確認される尖頭器石器群には、十川駄場崎遺跡6層を代表とする縄文時代草創期初頭(四国3群)と、不動が岩屋遺跡や奥谷南遺跡を代表とする縄文時代草創期の隆起線文土器段階(四国4群)があり、現段階で旧石器時代終末(細石刃石器群段階)から縄文時代草創期までの継続時間を考えることができる(多田2003a)。また、石斧については四国地方中・西部において多くの事例を抽出でき、旧石器時代終末(細石刃石器群段階)と縄文時代草創期の隆起線文土器段階に存在すると考えている(多田2000a・2008a・b・2015)。
- 4) 土地分類基本調査の報告によれば、篠山山地とその周囲に産出するホルンフェルスは、砂岩と泥岩の互層部が熱変成作用を受けたもので、砂岩を起源とするものは灰白色・淡灰紫色・淡青緑色・淡紫褐色・淡青灰色等の色調を帯び、珪質となって緻密で堅硬となる。泥岩起源のものは赤紫色・黒色となり、光沢をもち緻密で貝殻状の断面になるとされている(永井・鹿島1975、永井・吉田1976)。西南四国における旧石器時代遺物には、前記の記載に従えば肉眼観察上は多くが泥岩起源によるものと思われる。

なお、西南四国における旧石器時代遺物に対して最も早く頁岩という用語を用いたのは木村剛朗氏で、氏の著書に掲載されている池の岡遺跡の石器の記載に「硬質頁岩」の用語が確認できる(木村1979)。ただし、この石材として木村氏が示した石器は剥片であり、その所属時期は不明である。また、和口西の駄場遺跡を初めて報告した猪石広明氏は、この遺跡で確認された石器について「頁岩」という用語を用いている(猪石1987)。しかし、石材認定については研究者たちに多くの迷いがあったと思われる事例がある。例えば木村氏も池の岡遺跡の報告時には「チャート」を含むとしており、さらに山口将仁氏が発表した1990年代前後における一連の論考でも「チャート」とする記述を確認することができる。その後、木村氏は池の岡遺跡におけるナイフ形石器の石材を「頁岩」に変更し、山口氏も宇須々木遺跡と影野地遺跡におけるナイフ形石器の石材について、「チャート」から「頁岩」へと修正する考えを示した(木村2003、山口1989・1997b)。いずれの事例も石材認定の難しさを知ることのできる研究史の一面であろう。
- 5) 大分県大野川流域における船野技法に伴うスクレイパーについては、大形の剥片を素材として急角度の鋭利な刃部を有することや、大きい打面幅となる剥片が素材となることが知られている(鈴木1988、橋1981)。

## 参考文献

- 一本松町史編集委員会1979『一本松町史』一本松町
- 一本松町教育委員会1994『茶堂II遺跡発掘調査報告書』
- 池尻伸吾2006「中四国地方におけるナイフ形石器文化後半期の様相」『九州旧石器』第10号、九州旧石器文化研究会
- 犬飼徹夫1982「池の岡遺跡A地点で新発見の遺物について」『遺跡』22、遺跡発行会
- 猪石広明1987「南宇和郡御荘町和口遺跡発見の旧石器について」『愛媛考古学協会発表資料』愛媛考古学協会
- 猪石広明1989「愛媛県一本松町大駄場遺跡の先土器時代遺物について」『愛媛考古学』11 愛媛考古学協会
- 氏家敏之2004「四国太平洋沿岸」『中・四国地方旧石器文化の地域性と集団関係』中・四国旧石器文化談話会
- 氏家敏之2014「中・四国地域における先土器時代後半期石器群」『青藍』第10号、考古フォーラム蔵本
- 愛媛県史編さん委員会1982『愛媛県史 原始・古代I』愛媛県
- 愛媛県史編さん委員会1986『愛媛県史 資料編 考古』愛媛県
- 沖野 実2013「赤色珪質岩」『石器石材と旧石器社会』中・四国旧石器文化談話会
- 沖野 実2014「四国地方における旧石器時代遺跡の展開とその特徴」『九州旧石器』第18号、九州旧石器文化研究会
- 門脇 隆・岡村幹彦・坂本由美子・前田光雄2001『ナシヶ森遺跡』高知県幡多郡大月町教育委員会
- 木村剛朗1979『西南四国旧石器・縄文の新発見遺跡と遺物』土佐考古学叢書3
- 木村剛朗1987『四万十川流域の縄文文化研究』幡多埋文研
- 木村剛朗1995『四国西南沿海部の先史文化』幡多埋文研
- 木村剛朗2001「南四国における旧石器・縄文期の文化様相」『くろしお』No.11、高知大学黒潮圏研究所
- 木村剛朗2003『南四国の後期旧石器文化研究』幡多埋文研
- 木村剛朗さん追悼論集刊行会2009『考古学の源流 木村剛朗さん追悼論集』
- 熊原康博・長岡信治2002「四国南西部、松田川流域における九重第一テフラの対比と低位段丘の年代」『第四紀研究』41、日本第四紀学会
- 高知県1968『高知県史 考古編』
- 古環境研究所2001「第IV章大月町ナシヶ森遺跡の火山灰分析」『ナシヶ森遺跡』高知県幡多郡大月町教育委員会
- 鈴木忠司1988「8章 平安博物館調査地点の先土器時代遺物群」『宮地前報告』橘 昌信編、別府大学附属博物館
- 早田 勉1999「第4章第1節 中駄場遺跡におけるテフラ分析」『中駄場遺跡』愛媛県埋蔵文化財調査センター
- 十亀幸雄1979「愛媛県松野町出土の木葉形尖頭器」『遺跡』16、遺跡刊行会
- 十亀幸雄1984「高知県影野地出土のナイフ形石器」『旧石器考古学』29、旧石器文化談話会
- 十亀幸雄1988「四国西部における国府系石器群」『中・四国地方西部における瀬戸内技法の様相』中・四国旧石器文化談話会
- 竹口加枝美・多田 仁2002『東峰遺跡第2・4地点 高見I遺跡』愛媛県埋蔵文化財調査センター
- 多田 仁1995「四国南西部の船野型細石核」『旧石器考古学』51、旧石器文化談話会
- 多田 仁1997「中・四国地方における角錐状石器の様相」『九州旧石器』第3号、九州旧石器文化研究会
- 多田 仁1999『中駄場遺跡』愛媛県埋蔵文化財調査センター
- 多田 仁2000a「四国地方中・西部における旧石器時代終末から縄文時代草創期の石斧」『紀要愛媛』創刊号、愛媛県埋蔵文化財調査センター
- 多田 仁2000b「船野技法による細石核の細分について」『九州旧石器』第4号、九州旧石器文化研究会

- 多田 仁2001「羽佐島技法の再評価」『旧石器考古学』62、旧石器文化談話会
- 多田 仁2002「四国の尖頭器」『四国とその周辺の考古学』犬飼徹夫先生古希記念論文集刊行会
- 多田 仁2003a「西南四国の尖頭器」『紀要愛媛』第3号、愛媛県埋蔵文化財調査センター
- 多田 仁2003b「瀬戸内とその周辺における細石刃文化の一様相」『古代文化』55-8、古代学協会
- 多田 仁2008a「四国地方中・西部における旧石器時代終末から縄文時代草創期の石斧2」『紀要愛媛』第8号、愛媛県埋蔵文化財調査センター
- 多田 仁2008b「第9章 四国地方 -旧石器時代終末から縄文時代草創期の石器生産を中心に-」『縄文化の構造変動』佐藤宏之編、六一書房
- 多田 仁2011「南四国の細石刃文化」『高知県における旧石器文化の様相』中・四国旧石器文化談話会
- 多田 仁2014「愛媛県池ノ岡遺跡の後期旧石器時代遺物 -木村剛朗採集資料の紹介-」『紀要愛媛』第10号、愛媛県埋蔵文化財センター
- 多田 仁2015「四国地方中・西部における旧石器時代終末から縄文時代草創期の石斧3」『紀要愛媛』第11号、愛媛県埋蔵文化財センター
- 橘 昌信1981『大分県上下田遺跡』別府大学付属博物館
- 橘 昌信1991『池の岡遺跡試掘調査報告書』津島町教育委員会
- 橘 昌信1992『影平遺跡試掘調査報告書』津島町教育委員会
- 橘 昌信・多田 仁2013「西南日本における船野系細石刃石器群の形成と展開」『明治大学博物館研究報告』第18号、明治大学博物館
- 中原正光1981「和歌山県における先土器文化研究の現状(二)」『海南市史研究』6、海南市
- 中原正光1998「和歌山県下における先土器時代石器の地域色」『旧石器考古学』36、旧石器文化談話会
- 永井浩三・鹿島愛彦1975「II 表層地質図」『土地分類基本調査 伊予鹿島 宿毛』愛媛県
- 永井浩三・吉田 稔1976「II 表層地質図」『土地分類基本調査 岩松』愛媛県
- 西本則夫1987「高知県梶原町影野地出土の旧石器」『遺跡』30、遺跡発行会
- 藤野次史2006「中・四国地方、近畿地方の地域編年」『旧石器時代の地域編年の研究』安斎正人・佐藤宏之編、同成社
- 本田南城1989「御荘・和口西ノ駄場遺跡の発掘記録」『南うわ歴史と民俗』南宇和郷土史研究会
- 町田 洋1996「四国南西部における始良Tn テフラと鬼界アカホヤテフラ」『第四紀露頭集 日本のテフラ』日本第四紀学会
- 松村信博ほか2001『奥谷南遺跡III』高知県埋蔵文化財センター
- 松村信博・山崎真治2000「高知県出土の後期旧石器時代新出資料と細石刃文化期の遺跡」『第17回中・四国旧石器文化談話会発表資料』中・四国旧石器文化談話会
- 満塩大洗・出原恵三2000「高知県における後期更新世・完新世の環境変化」『高知大学学術研究報告』49、高知大学
- 宮崎県旧石器文化談話会2005「宮崎県下の旧石器時代遺跡概観」『旧石器考古学』66、石器文化談話会
- 森先一貴2011「国府系石器群の多様性」『旧石器考古学』74、旧石器文化談話会
- 森先一貴2013「瀬戸内技法の拡散と伝播」『石器石材と旧石器社会』中・四国旧石器文化談話会
- 森田尚宏1994『竜ヶ迫遺跡 ムクリ山遺跡』高知県大月町教育委員会
- 森田尚宏1995「1.宿毛市 池ノ上・楠山遺跡」『埋文こうち』第8号、高知県教育委員会
- 森田尚宏1996「楠山遺跡発掘調査概要」『第13回中・四国旧石器文化談話会発表資料』中・四国旧石器文化談話会

森田尚宏 2001 「旧石器時代の変遷」『くろしお』 No.11、高知大学黒潮圏研究所  
山口将仁 1975 「高知県初出土のナイフ形石器 - 宿毛市宇須々木遺跡 -」『西四国』 5、西四国郷土研究会  
山口将仁 1989 「高知県中村市双海中駄馬遺跡出土のナイフ形石器」『旧石器考古学』 38、旧石器文化談話会  
山口将仁 1990 「高知県における後期旧石器時代の様相」『旧石器考古学』 41、旧石器文化談話会  
山口将仁 1992 「高知県中村市双海中駄場遺跡出土の打製斧形石器」『旧石器考古学』 45、旧石器文化談話会  
山口将仁 1997a 「高知県下の旧石器と楔形石器(1)」『旧石器考古学』 54、旧石器文化談話会  
山口将仁 1997b 「高知県下の旧石器と楔形石器(2)」『旧石器考古学』 55、旧石器文化談話会  
和歌山市立博物館 2010 『よみがえる和歌山の縄文の世界』  
和口遺跡調査団 1989 「愛媛県和口遺跡第4地点の試掘調査」『第6回中・四国旧石器文化談話会発表資料』 中・四  
国旧石器文化談話会

## 四国地方中・西部における旧石器時代終末から縄文時代草創期の石斧3

多田 仁

### はじめに

これまでに本地域の当該期石斧について、2回にわたって資料の紹介を行ってきた(多田2000・2008a)。現在までに24遺跡33点の石斧を集成し、今回は新たに5遺跡5点の遺物を追加することになった(図1)。これによって現在までに27遺跡38点の類例が確認されたこととなった。

### 1 遺跡概要と石器の観察

#### 水満田古墳群(図2の1)

水満田古墳群は古墳時代中期の群集墳が分布することで知られている。古墳の分布する丘陵地は、松山平野を西流する重信川と南から流れ込む支流である砥部川の合流点付近にあり、周辺では縄文時代から弥生時代の遺跡が多数存在している。

石斧は全体形が撥形となるもので、刃部・基部ともに丸みを帯びた形態となる。表両面の刃部には研磨が施され、側面には刃部に直交する研磨も認められる。表裏両面の中央部には素材時の分割面が残され、いずれも剥離方向は本体の長軸である。側面観は比較的薄手となるもので、横断面形状は扁平な六角形状となる。表裏両面に残される素材時の剥離面や全体形状などからは、厚手の剥片が素材になったと考えられる。

#### 深泥遺跡(図2の2)

遺跡は四国西部の豊後水道に面した御荘湾沿いにあり、ここではリアス式海岸が発達し、海浜部方面に丘陵地や海岸段丘が展開している。遺跡の立地する丘陵地には東側に僧都川と蓮乗寺川の河口と汽水域が、そして西側には低湿地が形成されている。この遺跡では現在までに後期旧石器時代後半期のナイフ形石器、細石刃核ブランク、縄文時代早～中期の縄文土器や石鏃などが確認されている(木村1979・1995、多田1995)。さらには石斧も確認されており、船野型細石刃核との接点を考える遺跡としても知られている(多田2000、橘・多田2013)。

石斧は基部から中間部が残存するもので、全体形は不明であるが基部は先鋭性をもつ。表面中央部には礫面が、裏面には破損時の剥離面が大きく残されている。調整剥離は大まかな剥離の後に細かな剥離で整えられたと考えられる。横断面形は破損が著しいために不明である。

#### 増田遺跡(仮称)(図2の3)

石斧の採集地は篠川支流の増田川に面した丘陵地にあり、周辺は山間部に囲まれ、増田川沿いに細長く発達した河岸段丘が展開する地域にある。約1km上流の中屋地区では遺跡の存在が知られており、ナイフ形石器や縄文土器、石斧、石鏃等が採集されている(一本松町教育委員会1994、木村2003)。

石斧は全体形が短冊形となるもので、刃部は丸みを帯びて基部は先鋭性をもつ。表裏面には大



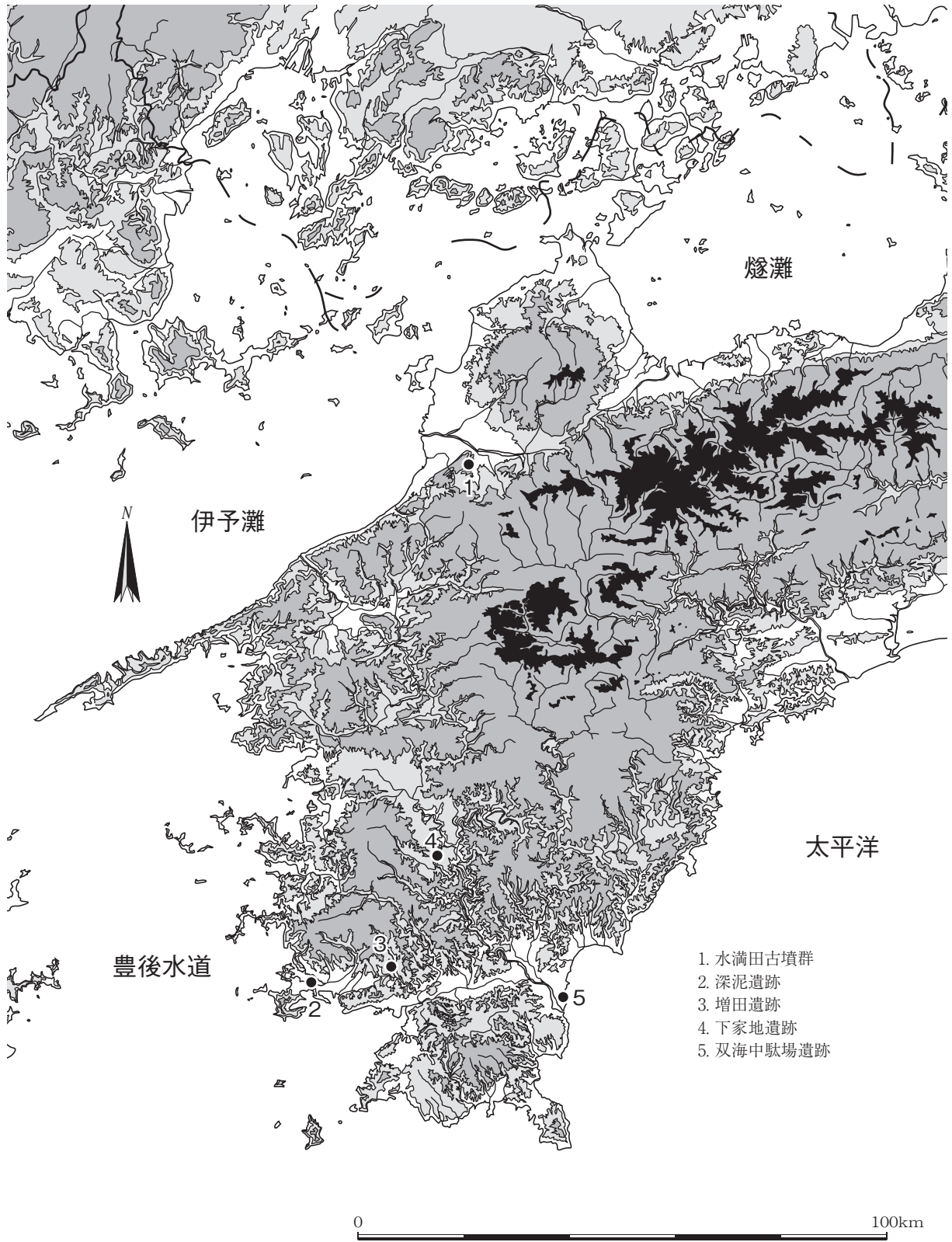


図1 遺跡分布図

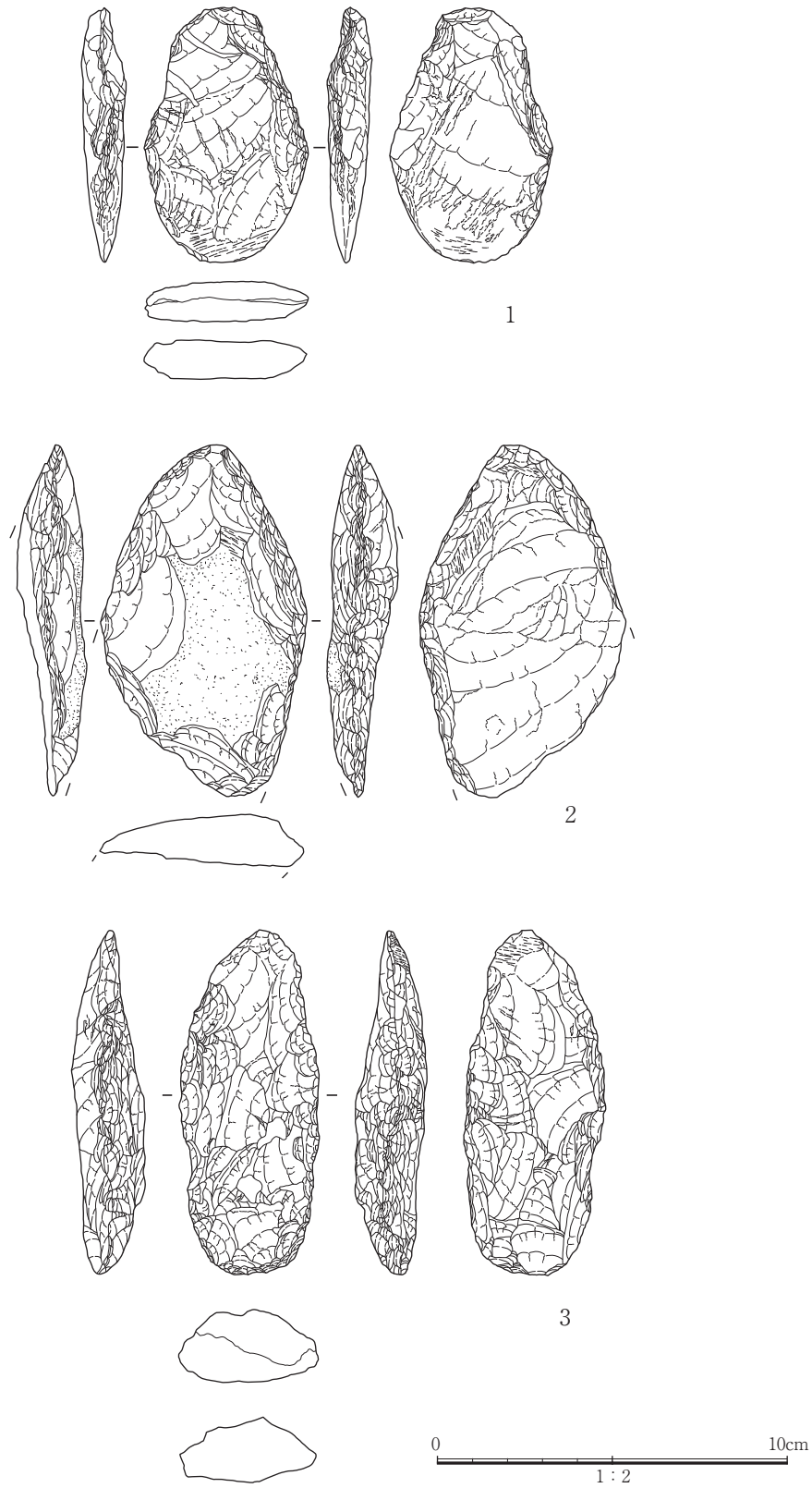


图2 石斧実测图1 (1.水満田古墳群 2.深泥遺跡 3.増田遺跡〔仮称〕)

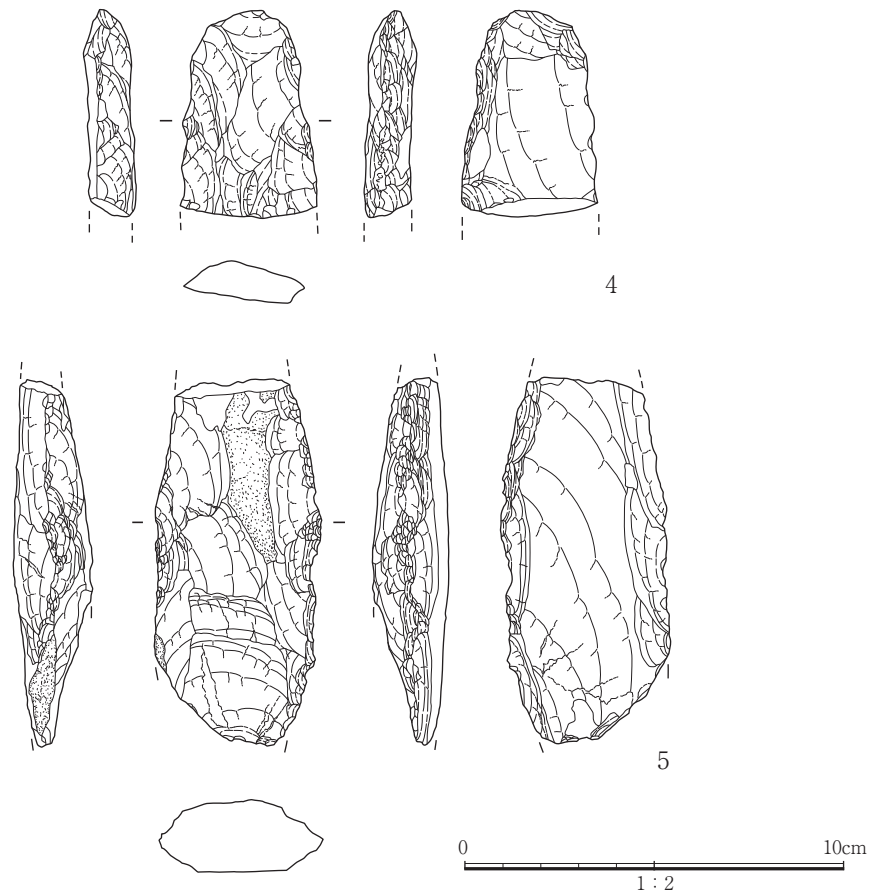


図3 石斧実測図1 (4.下家地遺跡 5.双海中駄場遺跡)

表1 石斧観察表

単位：cm.g

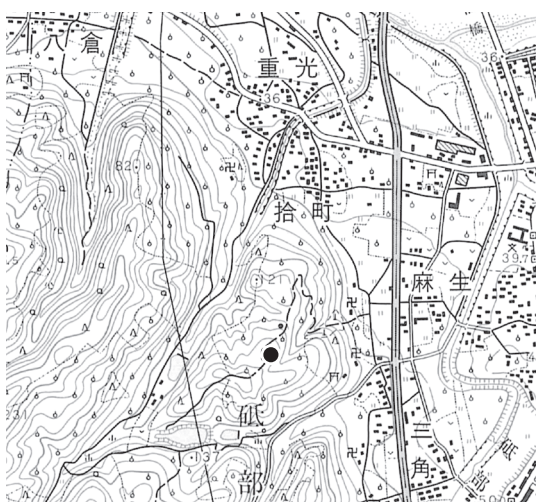
番号	遺跡	所在地	石材	石材の風化状況	最大長	最大幅	最大厚	重量	残存	保管	関連文献
1	水満田古墳群	愛媛県伊予郡砥部町	頁岩	黄褐色風化	7.3	4.7	1.3	41.60	完形	個人蔵	
2	深泥遺跡	愛媛県南宇和郡愛南町深泥	頁岩	灰色風化	10.0	5.9	2.0	95.31	刃部欠損	個人蔵	
3	増田遺跡(仮称)	愛媛県南宇和郡愛南町増田	頁岩	灰色風化	9.8	4.0	2.1	83.57	完形	個人蔵	
4	下家地遺跡	高知県四万十市西土佐江川崎	頁岩	灰色風化	5.4	3.6	1.4	33.53	刃部欠損	高知県立歴史民俗資料館	木村剛朗さん追悼論集刊行会2009
5	双海中駄場遺跡	高知県四万十市双海中駄場	頁岩	灰色風化	9.8	4.4	2.1	95.24	両端部欠損	高知県立歴史民俗資料館	木村剛朗さん追悼論集刊行会2009

まかな調整剥離痕が残され、周囲には細かな剥離が認められる。基部の表裏面には研磨痕が残されており、横断面形は凸レンズ断面状となる。

#### 下家地遺跡(図3の4)

遺跡は四万十川中流域と上流域の境界付近で、四万十川の支流である広見川が合流する地域にある。遺跡の立地は広見川右岸に流れ込む支流沿いにあり、四方を山間部に囲まれた小規模な河岸段丘が形成される地域である。周辺には四万十川と広見川の合流点付近にある宮地遺跡が知られており、ここでは石斧と有舌尖頭器の採集が報告されている(多田2003・2008a)。





水満田古墳群



深泥遺跡



増田遺跡 (仮称)



下家地遺跡



双海中駄場遺跡

図4 遺跡位置図 (1:25,000)

石斧は刃部を欠損するもので、全体形は短冊形になると考えられるものである。基部側は方角状となり、側面観は扁平な形状となる。表面中央部には大まかな調整剥離痕を、裏面中央部には素材時の剥離痕が残され、周囲には細かな調整痕が認められる。横断面形は偏りをもつ扁平な長方形形状となる。

#### 双海中駄場遺跡(図3の5)

遺跡は四万十川下流域から北方に開けた海岸段丘上にあり、この一帯は広く段丘の平坦面が展開している。本遺跡は古くから後期旧石器時代から縄文時代の遺物が採集される場所として知られており、周辺には同様な資料が採集された平野茶園遺跡や初崎遺跡なども確認できる。なお、本報告以前にも当該期石斧と尖頭器の採集が報告されている(木村2003、多田2000・2003・2008a)。

石斧は刃部と基部が欠損しているもので、中間部付近の残存状況からは短冊形と考えられるものである。表面の中央部には礫面を、裏面の大部分には素材時の分割面が残されており、表裏両面には周囲からの大まかな調整剥離が認められている。横断面形は扁平な六角形状となり、側面観は表面側にやや膨らみをもつ形状となる。

## 2 石斧の分類

これら石斧を2000年に行った分類に準じてみると(多田2000)、短冊形が3～5(増田・下家地・双海中駄場)の3点、撥形が1(水満田)の1点となる。2(深泥)については破損が著しいために全体形は不明である。このように短冊形が多くなる点については、これまでの集成とほぼ同じ点数比であるといえよう。

## 3 石斧の使用石材

本稿で報告するものはすべて頁岩である。この頁岩は西南四国一帯で確認できるもので、この地域では後期旧石器時代から弥生時代に至るまで使用されているものである。ここで石材について注目できる現象は、水満田古墳群において確認された石斧の事例であろう。この石斧の使用石材は西南四国で産出される頁岩に比定でき、四国地方中部から西部にかけての類例としては、石材原産地から最も遠距離においての確認事例である。基本的にこれまでの集成では、使用石材は在地産出のものを使用する傾向にあったが、水満田例では遠隔地石材の使用ということになる。現段階では理化学分析を行ったものではなく、可能性を指摘するのみではあるが、当該期石斧の分布的中心地から離れた地域で確認されたことは、この石斧の動態を考える上でも興味深い現象であろう。

## 4 遺跡の分布と立地

これまでの集成では、海岸・河岸段丘や丘陵地で発見される事例が多く、その他は岩陰遺跡2例、山地部斜面2例である。今回の報告で新たな遺跡の例を見ると河岸段丘上2例、海岸段丘1例、丘陵地3例であり、これまでに確認されている事例から大きくかけ離れたものではない。

## 5 石斧の編年観

石斧の編年観については、これまでも述べてきた考え方と大きく変更する点はない。今回報告する資料の中には、深泥遺跡や双海中駄場遺跡のように船野系細石刃石器群との関連を示唆できるものがある(多田2008a、橘・多田2013)。ただし、深泥遺跡の場合、この遺跡では縄文時代早期から前期の遺物も確認されており、石斧の形態は不明であるものの、比較的新相である撥形の一群に属する可能性もある。隣接する東九州では大分県市ノ久保遺跡のように船野系細石刃石器群に撥形の石斧が伴うこともあり(橘・多田2013)、ここでは積極的に細石刃石器群段階のものと考えておきたい。なお、増田・下家地例についても形態的にみて細石刃石器群との関連を考えておく。水満田例については細石刃石器群または土器と結びつく積極的な根拠に乏しいため、ここでは後期旧石器時代終末(細石刃石器群)から縄文時代草創期までの時期範囲を想定しておきたい。

## 6 四国における石器群の動態

本稿で紹介した石斧については、四国全域からみた時に分布的偏りをもつことが考えられる(多田2008b・2014)。特にこの段階の石斧は西南四国に集中して確認され、四国中部地域では極めて少数となり、瀬戸内海沿岸地域では本稿で紹介した水満田例以外に確認できない。瀬戸内海沿岸における当該期石斧の存在については、普遍的な様相であるのかは慎重に判断しなければならない。つまり、現状では細石刃石器群段階における南北二極化から、縄文時代草創期に入ってから有舌尖頭器における若干の分布拡大は考えられるが、石斧については分布の拡大を積極的に評価できる材料は少ないだろう(多田2014)。

西南四国における細石刃石器群段階の石斧は、東九州に密に分布する船野技法の伝播によって成立したものと判断でき、この伝統が縄文時代草創期まで引き継がれていると思われる。石斧にみる四国南北の石器伝統の差は、後期旧石器時代の終末に定着した石器装備の差が現れたものと理解できよう。

### おわりに

本稿は2000・2008年における報告の続編である。資料増加は少なく関連する研究が深められているとはいえ、今後も多くの論証が必要な分野である。ただし、船野系細石刃石器群との関連は十分に考えられ、さらに近年ではこれらの石斧が後期旧石器時代終末から縄文時代草創期に位置づけることも安定した評価を得ていると考える。水満田例にみるような類例増加によって、当該期石斧の分布拡大も想定されるばかりでなく、その盛衰についても議論が深められることに期待したい。

今回の報告にあたっては久保国和、中谷美郎、濱田 薫、藤田諸三の各氏からご協力を得た。ここに記して感謝したい。

(2014年7月25日)



## 参考文献

- 一本松町教育委員会 1994 『茶堂Ⅱ遺跡発掘調査報告書』
- 木村剛朗 1979 『四国西南旧石器・縄文期の新発見遺跡と遺物』 土佐考古学叢書3
- 木村剛朗 1995 『西南四国沿海部の先史文化』 幡多埋文研
- 木村剛朗 2003 『南四国の後期旧石器文化研究』 幡多埋文研
- 多田 仁 1995 「四国南西部の船野型細石核」 『旧石器考古学』 51、旧石器文化談話会
- 多田 仁 2000 「四国地方中・西部における旧石器時代終末から縄文時代草創期の石斧」 『紀要愛媛』 創刊号、愛媛県埋蔵文化財調査センター
- 多田 仁 2003 「西南四国の尖頭器」 『紀要愛媛』 第3号、愛媛県埋蔵文化財調査センター
- 多田 仁 2008a 「四国地方中・西部における旧石器時代終末から縄文時代草創期の石斧2」 『紀要愛媛』 第8号、愛媛県埋蔵文化財調査センター
- 多田 仁 2008b 「第9章 四国地方 -旧石器時代終末から縄文時代草創期の石器生産を中心に-」 『縄文化の構造変動』 佐藤宏之編、六一書房
- 多田 仁 2014 「四国における旧石器時代終末から縄文時代草創期への動態」 『続・上黒岩岩陰遺跡とその時代 -縄文時代早期の世界-』 平成26年度特別展図録、愛媛県歴史文化博物館
- 橋 昌信・多田 仁 2013 「西南日本における船野系細石刃石器群の形成と展開」 『明治大学博物館研究報告』 18、明治大学博物館



## 愛媛県内出土の東海系中世陶器について

首藤久士

### はじめに

愛知県をはじめとする東海地域は、「セトモノ」と呼ばれる陶器生産が行われており日本屈指の窯業生産地のひとつである。生産開始の時期は古く、調査された窯のうち最古である東山111号窯(H111号窯)は須恵器とともに埴輪を併焼する埴輪併焼窯で、陶邑窯(大阪府)の操業初期であるTK216号型式(5世紀中葉)に遡るとされている(斎藤ほか1995)。

猿投窯(愛知県)を中心とした古代の東海諸窯では、須恵器生産とともに緑釉陶器のほか灰釉陶器の生産が行われた。中世の窯業生産については、灰釉陶器の技術系譜を引くことから植崎彰一氏により<sup>しき</sup>瓷器系と定義され、東海産のやきものの大きな特徴となっている(植崎1977)。

中世には灰釉陶器碗の系譜を引く山茶碗が誕生するほか、瀬戸窯や美濃諸窯をはじめ常滑窯、渥美・湖西窯などの大型生産地が成立、それぞれ特徴を持ちながら中世陶器の生産が行われている(図1)。

また山茶碗に後出する形で、「うわぐすり」を掛けた古瀬戸および瀬戸・美濃製品の生産が開始され、全国に流通圏を広げることから常滑製品の全国流通と併せて、東海地方が日本における中世陶器生産地の代表的存在と認識されるに至っている。

このように全国的に流通する東海産の中世陶器は、愛媛県内からも一定量出土が確認されている(瀬戸市文化振興財団2006)。小稿では、県内から出土する東海系中世陶器を集成・概観し、生産地から遠く離れた愛媛の地での消費の場における特徴や傾向を導き出していきたい。

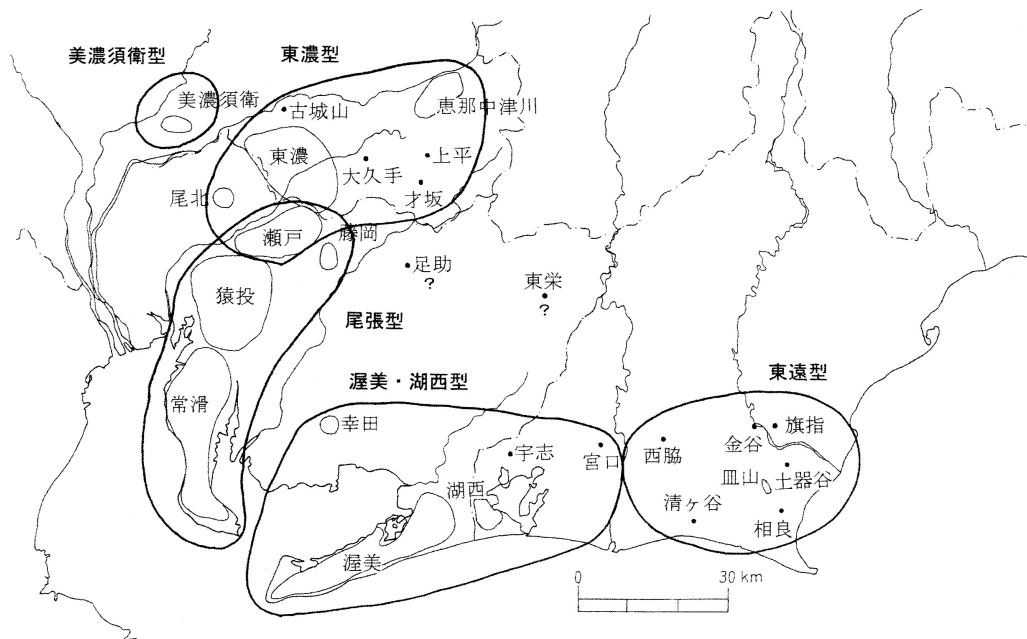


図1 東海地方の窯業生産地 (藤澤2012)

## 1 愛媛県内の出土状況

今回の集成により県内で確認されたものは、山茶碗、渥美製品、常滑製品、古瀬戸および瀬戸・美濃製品である。

### 山茶碗(表1、図2)

山茶碗は松山平野で2点の出土が見られる。いずれも後述する常滑製品と出土遺跡が重複しており、山茶碗のみの出土はない。双方ともに細片であるが、藤澤編年(藤澤1994)の第5型式(13世紀前半)前後と捉えられる。量的に見ると、一般的な流通が行われたとは考えにくく他の東海製品とともに搬入されたか、流通業者などの個人が持ち込んだものと考えられる。

### 渥美製品(壺・片口鉢)(表2、図2)

また渥美窯製品については、今治平野の蒼社川流域で片口鉢の出土が2例報告されている。時期的には、12世紀後半～13世紀初頭(愛知県史編さん委員会2012)である。同じく少量の出土が確認されている常滑窯産片口鉢の例を参照するならば、鉢類のみが単体で搬入されているとは考えにくく壺甕類も付随すると想定され、今後は今治平野周辺において他器種の出土が確認される可能性がある。松山平野では過去に石手寺裏山経塚から袈裟襷文小壺が出土したとのことであり<sup>1)</sup>、経塚など宗教関連の遺跡を中心に供給されていると想定される。

### 常滑製品(広口壺・片口鉢)(表3、図3)

常滑製品については31遺跡62個体分が報告されている。ただし広口壺<sup>2)</sup>は大型であるため、破片数が多くなることから個体数も多く認識されている可能性がある。器種としては広口壺が大多数を占めるとともに片口鉢I類は2例の報告が見られ、その他には石手寺境内より出土と伝わ

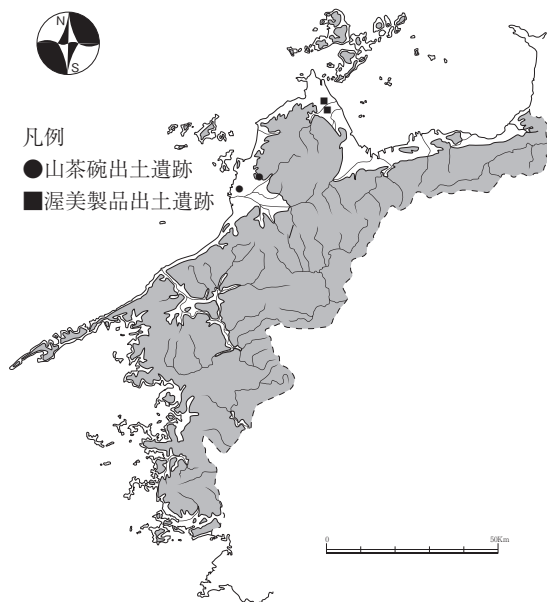


図2 山茶碗、渥美製品出土遺跡

表1 山茶碗出土遺跡一覧

市町村名	遺跡名	器種
松山市	石手村前	山茶碗
	南江戸蘭目	山茶碗

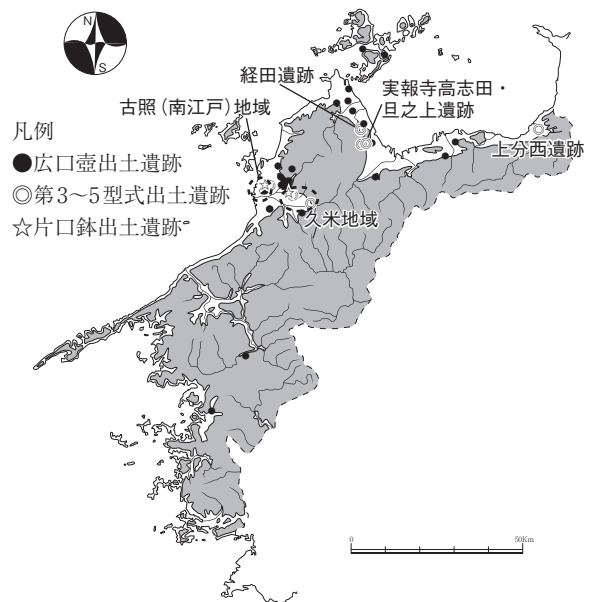


図3 常滑製品出土遺跡

表2 渥美製品出土遺跡一覧

市町村名	遺跡名	器種
今治市	小泉アツコ	片口鉢
	八町	片口鉢

る三筋壺が1例確認される(愛媛県立美術館2014)。調査事例の蓄積がある松山平野と今治平野では面的な広がりが確認でき、中世遺跡の多くで破片などが出土していることになる。

時期については、中野晴久編年(愛知県史編さん委員会2012)第3型式～第9型式(12世紀後半～15世紀前半)で流通が確認される。第5型式～第6型式(13世紀中葉～末)においてピークを迎え、以後に減少する傾向にある。多く出土する第5型式以降は、常滑窯においても装飾の簡略化とともに窯の大型化による本格的な甕類の量産体制が整う時期で、窯数がピークを迎えるという生産地の動きと連動している(愛知県史編さん委員会2012)。

片口鉢Ⅰ類については2例の出土が確認された。いずれも広口壺と重複もしくは近隣よりの出土が見られることから、山茶碗と同様に流通品とは考えにくく、他器種の付属品か輸送者により直接持ち込まれたものと考えられる状況である。時期としては12世紀後半～13世紀前半と捉えられ、比較的短期間に収まっている。

**瀬戸・美濃製品(瓶子類・天目茶碗・卸皿など)**  
(表4・5、図4)

瀬戸・美濃製品については、調査事例が多い松山平野や今治平野で面的な広がりが確認された。全体では61遺跡から出土が報告され、器種(愛知県史編さん委員会2007)については、瓶子類、水注、水滴、入子、天目茶碗、小天目、平碗、丸碗、香炉、卸皿、折縁皿、折縁深皿、折縁中皿、折縁小皿、丸皿類、端反皿、稜皿、内禿皿、縁釉小皿、豆皿、花瓶、小杯、播鉢型小鉢などが確認された。

表3 常滑製品出土遺跡一覧

市町村名	遺跡名など	器種	時期	数
四国中央市	上分西(乗安地区)	甕	3	1
新居浜市	上郷	甕		1
	中村岡の久保	甕	6b	1
西条市	安養寺	甕	5	1
	長網Ⅰ	甕	9	1
	実報寺高志田	甕	(3)～4	1
	旦之上	甕	3～4?	1
今治市	能島城跡	甕	5～6	3
	大三島沖	甕	2	1
	正法寺	甕	6b	1
	阿方牛ノ江	甕	5～6?	2
	馬越	甕	5～6a	1
	八町	甕	6a?、7	1
	登畑	甕	6、9	6
	経田	甕	2～3、5～6a	3
東温市	拝志古窯群	甕?		
	竹ノ鼻	甕	3～4?	2
松山市	湯築城跡	甕	9	1
	道後町	甕	5～6	2
	道後今市	甕	5～6b	4
	石手村前	甕	8	1
	石手寺裏山経塚	三筋壺	2	1
	大畑	甕		4
	古照	甕	5	1
	南斎院土居北	甕	6a	1
	南江戸園目	甕	4～7?	12
		片口鉢	2～3	1
	久米高畑	甕	4	2
	筋違G	片口鉢	5	1
	樽味	甕	6a	1
	枝松	甕	6b	1
平田七反地	甕	6b	1	
伊予市	伊予神社Ⅱ	甕	6b	1
宇和島市	板島城跡	甕	5～6b	2

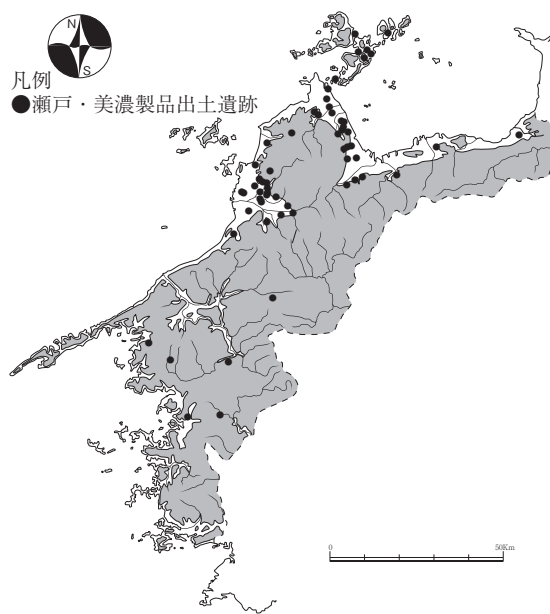


図4 瀬戸・美濃製品出土遺跡

表4 瀬戸・美濃製品出土遺跡一覧1

市町村名	遺跡名など	器種	
四国中央市	上分西	卸皿 縁釉小皿?	
	上分西(乗安地区)	入子	
新居浜市	上郷	皿	
西条市	横山城跡	瓶子I類	
	鶴来が元	瓶子	
	安養寺	瓶子II類	
	明徳東岡	瓶子II類	
	星野	天目茶碗 天目茶碗	
	久枝	天目茶碗	
		袴腰形香炉 卸皿	
	長網I	平碗	
	旦之上	天目茶碗	
	上島町	土居ノ内	不明
	今治市	見近島城跡	天目茶碗
		臥間	天目茶碗
		松ヶ鼻・梅ヶ鼻城跡	小皿類?
		甘崎城跡	天目茶碗?
甘崎城跡搦手浜		天目茶碗	
甘崎城跡南西海岸		天目茶碗	
能島城跡		天目茶碗	
		平碗	
		卸皿	
		筒形香炉	
		折縁中皿	
		丸皿	
		豆皿	
		播鉢型小鉢?	
		瓶子?	
		宮ノ谷	天目茶碗
		別宮上河内	折縁皿
野間入鹿谷清水山城		折縁皿	
高橋山崎		天目茶碗	
馬越和多地		天目茶碗	
八町		天目茶碗 折縁中皿	
高市徳森		折縁皿	
登畑		内禿皿	
伊予国分寺跡		折縁小皿	
旦		天目茶碗	
郷桜井堀		折縁小皿	
経田		天目茶碗	
東温市		拝志古窯群	卸皿?
		竹ノ鼻	小型坏?
		保免	播鉢型小鉢
松山市		湯築城跡	天目茶碗
			小天目
			丸碗A
	端反皿		
	稜皿		
	平碗B		
	瓶子		
	内禿皿?		
	卸皿		
	折縁深皿		
	豆皿		
	水滴		
	道後町		天目茶碗
			丸碗?
		丸皿?	
		内禿皿?	

表5 瀬戸・美濃製品出土遺跡一覧2

市町村名	遺跡名など	器種	
松山市	道後町	稜皿?	
		卸皿?	
	石手村前	稜皿	
		卸皿 天目茶碗?	
	大畑	天目茶碗	
	県民会館跡地	天目茶碗 向付	
	松環古照	天目茶碗	
	古照	天目茶碗	
	北斎院地内	花瓶?	
		天目茶碗 卸皿	
	南斎院土居北	水注	
		天目茶碗	
		稜皿?	
		丸皿	
		折縁皿	
		袴腰形香炉	
		折縁深皿	
		端反皿?	
		香炉?	
		天目茶碗	
	古市	天目茶碗	
	星岡登立	天目茶碗	
	石井幼稚園	水滴	
	筋違L	折縁皿	
	樽味	碗?	
		瓶子	
		天目茶碗 卸皿	
	北井門	卸皿	
		折縁皿	
	小坂	灰釉碗	
	猿川西ノ森	折縁皿	
		丸皿?	
	福角	天目茶碗	
		天目茶碗	
	大相院	瓶子II類	
		瓶?	
	別府	卸皿	
	砥部町	千足	平碗? 卸皿
		伊予市	伊予神社II 尼ヶ古城跡
	内子町	碗?	
		小杯?	
	太田城跡	天目茶碗 瓶子?	
	八幡浜市	八幡浜元城跡	天目茶碗
西予市	音地	天目茶碗 壺? 瓶子 坏	
	鬼北町	等妙寺跡	
		天目茶碗 袴腰形香炉	
宇和島市	板島城跡	天目茶碗 小壺	
	高田八幡神社伝世品	瓶子II類	
松野町	河後森城跡	丸皿 筒型香炉 天目茶碗	



そのうち天目茶碗などの碗類は茶の湯文化と関係があり、比較的多くの中世遺跡で確認できることから、地域の権力者以外の一般的な富裕者層にまで当該文化が普及していた状況が反映されていると思われる。古瀬戸前期から後期前半では、瓶子類や卸皿等が主に搬入されており、古瀬戸後期後半から大窯期においては、天目茶碗を中心とする碗皿類が主体となる。瀬戸・美濃製品に対する人々の認識やニーズが変化する中で、限られた上位階層のみが入手可能であった非日常的な器種から受容層の拡大した天目茶碗や皿類などへ生産・流通がシフトしたと考えられる。

## 2 流通の様相

伊予への流通経路については、大きく瀬戸内周りと太平洋周りの2ルートが想定される。瀬戸内経路については京都や畿内と九州を結ぶのみならず、東アジアともつながる物流の大動脈であった。山陽および四国沿岸の両航路は地乗りルートと呼ばれ、島嶼部の最短距離である沖乗りルートとともに主要な航路であった。『兵庫北関入船納帳』（1445年）によると、多種多様な品物が行き来していたことがうかがえるため東海系中世陶器の主要な搬入ルートであったと想定される。(橋本・市村編2004)。

太平洋周りについては近年、高知県上ノ村遺跡の調査により研究が進展した(池澤2010、出原2010)。仁淀川河口部の川津の性格が考えられており、常滑製品などの東海系陶器が多く出土するとともに紀伊型土師器も見られることから、紀伊半島を経由し太平洋航路で土佐まで運ばれたことが明らかになっている。県内のうち南予地方は、調査事例の面的な蓄積が十分とは言えないが一部の城郭や寺院などへ局地的に東海製品が入ることが、これまでの調査で報告されている。伊予郡以東の中予東予地方と分布の様相が異なっていることから、瀬戸内経路とは別に土佐を経由する太平洋経路も搬入ルートの一つとして視野に入れる必要がある<sup>3)</sup>。

## 3 使用状況

常滑窯産広口壺は中世遺跡の包含層や単体出土が多い。溝などで他器種とともに廃棄されており、日常使いの貯蔵具として認識、使用されたと考えられる。他地域の事例を参照すると液体を入れた容器としての搬入・一次使用も想定される。そのほか経筒外容器(西条市安養寺遺跡)、蔵骨器(今治市正法寺遺跡)、備蓄銭の容器(新居浜市岡の久保)としても使用されることが分かる。また、消費地へ向けた海上輸送中に船が沈没し後に引き上げられた例もある(今治市大三島沖)(真鍋1991)。

瀬戸・美濃製品については中世前期の瓶子類が四国縦貫自動車道建設に伴う調査で単体出土しており、経筒外容器(安養寺遺跡)や蔵骨器(安養寺遺跡?)など主として宗教関係に利用されたと推定される。また詳しくは後述するが、中世後期の遺跡からも当該期の遺物と共に中世前期の瓶子類が見つまっていることから、骨董品などの威信材として価値が付加され儀式などに使用されたと考えられる。

#### 4 中世前期の常滑製品

ここからは、愛媛県内における東海系中世陶器の分布に関し一定量の出土が見られた常滑製品および瀬戸・美濃製品について、資料的制約があるものの試論的にいくつか言及したい。

鎌倉期の瀬戸・美濃窯については、鎌倉遺跡群で多量出土することから鎌倉幕府の御用窯との指摘がある(藤澤1995、吉岡1997)。常滑窯についても、12世紀後半以降に鎌倉で多く見られることから鎌倉幕府との関係が考えられている(愛知県史編さん委員会2012)。

池澤俊幸氏によると、常滑製品の古手の製品である中野編年第3型式～第4型式については四国での出土が限定され、土佐では国衙等拠点的な遺跡に限られている(池澤2010)。

県内で上述の早い時期の搬入が確認できる遺跡は、上分西遺跡乗安地区(四国中央市)、実報寺高志田・旦之上遺跡(西条市)、経田遺跡(今治市)、南江戸くじゅめ蘭目遺跡(松山市)、竹ノ鼻・久米高畑遺跡(東温市・松山市)であり、上記5つの地域にまとめることができる。

そのうち南江戸地域においては、南江戸蘭目遺跡から古手の常滑製品が比較的まとまって出土している。隣接する松環古照遺跡IV-2区からは中世前期の方形区画溝が出土しており、南江戸地域は武蔵より下向の江戸氏と関係がある地とされている(中野2004)。これは関東御家人ゆかりの地域に常滑製品が一定量確認できる事例である。しかし、関東からは他にも多くの西遷御家人が伊予へ進出しており(愛媛県史編さん委員会1984、川岡2003)、現在の出土状況をみる限りでは全ての関東御家人が東海製品を優先的に入手したとは限らない(表6)。

また、山内讓氏によって得宗領と指摘されている久米地域については(山内1998)、現在の分布状況(表3)からは細片遺物や包含層出土のみで好資料に欠くが、竹ノ鼻遺跡や同じ重信川水系の久米高畑遺跡などに4型式と思われる古手の常滑製品が確認できる。よって当地は、比較的早く

東海系陶器を入手可能な環境にあったと考えられる。

いずれも関東御家人や北条得宗家との関係が想定されるが、史料により活動が確認される時期<sup>4)</sup>である13世紀後半～14世紀前半よりも、常滑製品が古いものを含む傾向がある。長期使用の可能性もあるが、中世の早い段階から周辺に先立ち常滑製品が搬入されていた場所であったとも考えられる。県内では上記2地域のみで片口鉢が確認されることから、東海地方と距離が近い印象を受ける。また、備前焼の例を見ても竹ノ鼻遺跡および南江戸蘭目遺跡に隣接する南斎院土居北遺跡では、流通初期の備前焼である重根編年III期の搬入が確認できる(石岡2009)。

考古学的には鎌倉幕府や得宗家が流通に関与

表6 鎌倉時代の中予・東予の地頭一覧

補任地	地頭名	本貫地	備考
宇摩郡寒川	小河氏	武蔵国	
新居郡新居郷	金子氏	武蔵国	新補地頭か
周敷郡北条郷	多賀谷氏	武蔵国	新補地頭か
桑村郡安用名	頼秀		
越智郡高市郷	小早川氏	安芸国	
越智郡高橋別名			
越智郡鴨部荘			
越智郡弓削島荘	小宮氏	武蔵国	新補地頭
越智郡三島荘	北条氏か 三善氏か平某		
野間郡宅万			
風早郡忽那島荘	忽那氏	忽那島	
和気郡大内郷			
和気郡吉原郷			
温泉郡井上郷			
温泉郡恒弘名	鶴岡八幡宮か	鎌倉	
久米郡石井郷	河野氏	風早郡	
久米郡地頭職	河野氏 金沢氏(北条氏)	風早郡 武蔵国	
久米郡野口保	金沢氏(北条氏)	武蔵国	
久米郡良生名 国清名	金沢氏(北条氏)	武蔵国	
久米郡久米良郷	大仏氏(北条氏)		
伊予郡玉生出作	北条氏得宗		
伊予郡山崎荘	河野氏	風早郡	

※愛媛県史編さん委員会1984、pp.311-312表1-2を元に作成

した直接的証拠はないが、古手の常滑製品の分布(図3)と関東御家人や得宗領との関係を見ると、両者の重複事例がいくつか見られることは注目される。そして、久米地域および古照地域は他産地の製品を周辺に先んじて入手できる環境にあることから<sup>5)</sup>、松山平野の中で先進的ともいえる場所を鎌倉御家人や得宗家が手中にしたとも考えられる。

## 5 中世後期の瀬戸・美濃製品

中世後期の瀬戸・美濃製品は、地域の拠点的遺跡で多く見られる。天目茶碗については、茶の湯文化の普及に伴い比較的多くの中世遺跡で確認できる。ここでは、城郭、寺院、区画溝を伴う屋敷地において出土する瀬戸・美濃製品のうち特徴的な出土状況が認められた天目茶碗、卸皿、香炉、瓶子類の4器種における組み合わせについて考えていきたい。(表7、図5)

集成では15遺跡で上記の組み合わせの出土が確認された。天目茶碗については、ほとんどすべての遺跡で出土していることから、上位階層には普遍的に茶の湯文化が浸透していたことが分かる。香炉については6遺跡で見受けられる。瓶子類については中世後期の遺跡でみられるため、骨董品的価値を付加され威信材的な役割を果たしていたと考えられる(藤澤2001)。

器種の組み合わせについては、調査の偏在も影響しているとみられるが能島城跡が4器種すべて揃うのみで他に傾向は捉えられなかった。全てを持つ必要はなく、個々の必要に応じて入手されたものと考えられる。不足する器種については、貿易陶磁器などを合わせると補えるものが出てくるため他の素材と補完関係があったものと考えられる。

表7 瀬戸・美濃製品出土器種の組み合わせ

遺跡名	性格	天目茶碗	卸皿	香炉	瓶子類	補完器種など
久枝II	区画溝を伴う屋敷地	○	○	○		青白磁小壺
能島城跡	城郭	○	○	○	○	
湯築城跡	城郭	○	○		○	青磁香炉・白磁香炉
千足	区画溝を伴う屋敷地		○			青磁碗
北斎院地内	区画溝を伴う屋敷地	○	○			
南斎院土居北	方形区画溝(寺院?)	○		○		白磁四耳壺・古瀬戸水注
南江戸園目	区画溝を伴う屋敷地	○		○		白磁壺・四耳壺、青白磁梅瓶
樽味	区画溝を伴う屋敷地	○	○		○	
大相院・別府	区画溝を伴う屋敷地	○	○		○	
太田城跡	城郭	○			△	
八幡浜元城跡	城郭	○				
音地	区画溝を伴う屋敷地	○			○	
等妙寺跡	寺院	○		○		青磁瓶、褐釉陶器壺
板島城跡	城郭	○				青磁壺
河後森城跡	城郭	○		○		中国産黒釉壺・朝鮮半島産?壺

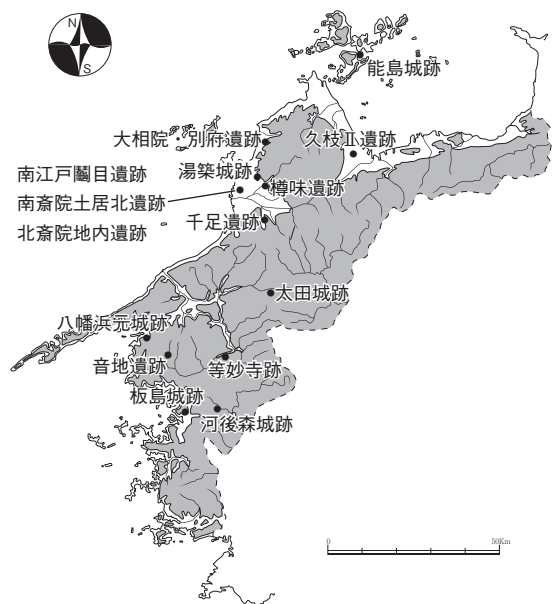


図5 中世後期の城郭、寺院、屋敷地

卸皿については、城郭および区画溝を伴う屋敷地に多い傾向がある。県内出土の生産年代は、14世紀～15世紀初頭にほぼ収まる。他地域でも使用痕が認められない例が多いことから(柴垣編2007)、実用品ではなく別の用途が想定される。また南予地方では現在のところ確認されておらず、一つの出土傾向を示している。

### まとめ

今回は、集成結果から主に常滑製品および瀬戸・美濃製品の流通状況と背景について考察を行った。器種別の盛長表(表8)を見ると、瀬戸・美濃製品は中世前期に瓶子類に限られた場所のみ見られた。中世後期では、天目茶碗や皿類などが比較的広い階層にまで浸透し入手しやすくなった反面、香炉や卸皿のような地域的権力者しか所有できない器種も流通しており、価値の二極化が見受けられた。また中世後期の限られた遺跡では、4器種の組み合わせを推定した。他にも補

表8 愛媛県における東海系中世陶器の器種別盛長表

産地	器種	12世紀後半	13世紀	14世紀	15世紀	16世紀
	山茶碗		—————			
渥美	片口鉢	—————				
常滑	広口壺	—————	—————	—————	—————	
	片口鉢	—————	—————			
瀬戸 美濃	瓶子類	.....	.....	.....		
	水注			.....		
	水滴			———		
	入子		.....			
	天目茶碗			.....	—————	—————
	小天目					.....
	平碗			.....	.....	—————
	丸碗				.....	
	香炉		.....		—————	—————
	卸皿		—————	.....	—————	
	折縁皿					—————
	折縁深皿			—————		
	折縁中皿			———		
	折縁小皿				—————	
	丸皿類					—————
	端反皿				—————	
	稜皿					—————
	内禿皿					—————
	縁軸小皿					
	豆皿				—————	.....
	花瓶					
	小杯					
	播鉢型小鉢				—————	.....



完関係にある貿易陶磁器(小野1997)、奈良火鉢(瓦質土器)など他産地の製品を併せて組み合わせることで、地域の有力者層の儀礼や生活で使用する器種が賄われていたと考えられる。中でも卸皿については表7に取り上げた遺跡以外からも出土しており、例外は認められるものの比較的多くの事例で地域の権力者、とりわけ武士との強い関係が想定される。

常滑製品については、流通初期段階のものが局地的に搬入されていることが判明した。そのうち松山平野では、初期常滑製品の分布状況と鎌倉幕府関連の支配領域との重なりが見られた。

課題としては、まず鉢類の搬入が少ないことである。瀬戸内対岸の草戸千軒町遺跡(広島県)では量的に商品と捉えられる常滑産片口鉢が出土しているが<sup>6)</sup>、県内では流通といえる状況ではない。瀬戸内を挟んだ南北で価値観が異なる土器陶器類はあまり知られておらず、背景などが不明である。

また、流通初期の常滑製品が出土したうち東予地方の3地域について、その歴史的背景の解明があげられる。先に触れた鎌倉御家人(表6)との地理的關係を見ると、上分西遺跡については宇摩郡寒川の小河氏、実報寺高志田・旦之上遺跡では周敷郡北条郷の多賀谷氏、経田遺跡は越智郡高市郷の小早川氏など出土遺跡の周辺地域で各勢力の進出が確認される。両者はいずれも3～5km程度と、比較的近距离にあることは今後注視していく必要がある。ただ水系が異なる事例や、前述の松山平野と同様に時期的な差が見られることから一概には言えないため、ここでは出土遺跡の周辺部に鎌倉御家人が配置されている事実を指摘するにとどめておく。

今回は、資料的制約のため推論に過ぎない場面もあった。今後は各地域における調査事例の蓄積により、現時点で東海系陶器との関係が判断できない新居郡の金子氏や伊予郡玉生出作の北条得宗領をはじめ、今回触れた事例の更なる分析が可能になることを期待したい。

最後になりましたが、小稿を草するにあたり下記の方々よりご教示をいただきました。記してお礼申し上げます。

石岡ひとみ、柴田圭子、鈴木康之、中野良一、橋本久和、吉成承三(五十音順・敬称略)

(2015年1月30日)

## 註

- 1) 石岡ひとみ氏よりご教示いただいた。(檜崎編1977)
- 2) 通常当該器種は甕と表記されるが、ここでは愛知県史(愛知県史編さん委員会2012)の分類に従う。
- 3) 天霧石製および花崗岩製石造物の分布状況からは(松田2011・黒川2013)、佐田岬沖を介する豊後水道ルートも主要航路として想定される。
- 4) 江戸氏については、建武三年(1336)に河野通盛軍中に江戸氏の名が確認できる(中野2004)。久米郡良生名については、弘安七年(1284)に北条顕時が地頭代職であった(山内1998)。
- 5) 前述の2遺跡以外にも、星原市遺跡、明穂中ノ岡V遺跡、大相院遺跡、道後町遺跡、湯築城跡、等妙寺跡などから重根III期の備前焼が出土しており(石岡2009)、全てではないところに留意する必要があるが、多くの事例が流通初期の常滑製品出土遺跡もしくは、その周辺地域と重複している。
- 6) 鈴木康之氏よりご教示いただいた。

## 参考文献

- 愛知県史編さん委員会2007『愛知県史 別編 窯業2 中世・近世 瀬戸系』愛知県
- 愛知県史編さん委員会2012『愛知県史 別編 窯業3 中世・近世 常滑系』愛知県
- 池澤俊幸2010「南四国に搬入された中世土器・陶磁器と海運」『中世土佐の世界と一条氏』高志書院
- 石岡ひとみ2009「四国出土の中世備前焼」『備前歴史フォーラム 鎌倉・室町 BIZEN ～中世備前焼のすがた～』  
備前市教育委員会・備前市歴史民俗資料館
- 愛媛県史編さん委員会1984『愛媛県史 古代Ⅱ・中世』愛媛県
- 愛媛県美術館2014『四国霊場開創1200年記念 空海の足音 四国へんろ展 愛媛編』愛媛編実行委員会
- 小野正敏1997『戦国城下町の考古学』講談社選書メチエ108
- 川岡 勉2003「中世社会の成立と西国武士団」『愛媛県の歴史』山川出版社
- 黒川信義2013「愛媛県における花崗岩製石造物の概要」『御影石と中世の流通－石材識別と石造物の形態・分布－』  
高志書院
- 斎藤孝正ほか1995『須恵器集成図録』第3巻、東日本編I、雄山閣
- 柴垣勇夫編2007『陶磁器の流通を探る』「中世土器・陶器における生産技術及び編年に関する全国的研究と流通  
様相の年代的解明」班
- 柴田圭子2000『15・16世紀の貿易陶磁 伊予(東予・中予)の様相～湯築城跡・見近島城跡を中心に～』日本貿易  
陶磁研究会
- 柴田圭子2010「道後町遺跡出土陶磁器の研究」『伊予史談』359号、伊予史談会
- 柴田圭子2011「瀬戸内海島嶼部の様相」『考古学と室町・戦国期の流通』高志書院
- 瀬戸市文化振興財団2006『中世瀬戸焼全国出土遺跡地名表2－中国・四国・九州編－』瀬戸市埋蔵文化財センター  
研究紀要第13輯別編、瀬戸市埋蔵文化財センター
- 中野良一2004「伊予の中世遺跡と湯築城跡」『湯築城と伊予の中世』創風社出版
- 檜崎彰一編1977「中世の社会と陶器生産」『世界陶磁全集』3日本中世、小学館
- 出原恵三2010『上ノ村遺跡I』高知県文化財団埋蔵文化財センター
- 橋本久和・市村高男編2004『中世西日本の流通と交通』高志書院
- 藤澤良祐1994「山茶碗研究の現状と課題」『研究紀要』第3号、三重県埋蔵文化財センター
- 藤澤良祐1995「瀬戸古窯址群Ⅲ－古瀬戸前期様式の編年－」『瀬戸市埋蔵文化財センター研究紀要』第3輯、瀬  
戸市埋蔵文化財センター
- 藤澤良祐2001「埋納された古瀬戸製品－特に大型壺・瓶類を中心として－」『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要』  
XVIII、瀬戸市歴史民俗資料館
- 藤澤良祐2009『中世瀬戸窯の研究』高志書院
- 藤澤良祐2012「施釉陶器の生産形態－瀬戸窯を中心に－」『シンポジウム中世渥美・常滑焼をおって』日本福祉  
大学知多半島総合研所、歴史・民俗部研究集会
- 松田朝由2011「香川県から来た石造物」『石造物が語る中世の佐田岬半島』岩田書院
- 真鍋篤行1991「瀬戸内海における海あがり考古資料調査報告(Ⅱ)」『瀬戸内海歴史民俗資料館紀要』第6号、瀬戸  
内海歴史民俗資料館
- 山内 譲1998「得宗領伊予国久米郡」『中世瀬戸内地域史の研究』法政大学出版局
- 吉岡康暢1997「新しい交易体制の成立」『考古学による日本歴史』9、雄山閣

## 編集後記

研究紀要『紀要愛媛』第11号が完成いたしました。

冒頭が多田による論考では、西南四国の旧石器時代についてその様相をまとめました。西南四国においては発掘調査による資料が少ないものの、先学達によって充実した資料蓄積があった経緯があります。今回の論考では石器の分類から編年までを提示しましたが、瀬戸内技法と船野技法の理解には、周辺地域との様相を交えた追証が必要となるでしょう。

さらに多田は西南四国における石斧の集成も提示しています。これまでに2編の紹介を行っていますが、その続編として報告したものです。少数ながらも未だ当該期石斧の類例増加は続いています。今後も本集成が継続されることを期待できます。

首藤は中世の東海地方で生産された常滑製品や瀬戸・美濃製品を整理し、愛媛県内における出土状況を分布論的視点で検討しています。本論中では松山地域における初期常滑製品の存在、東海系陶器流通の太平洋沿岸ルートを評価している点など、いくつかの課題も提示されました。また、中世後期における価値の二極化と限定された製品のまとまりは、今後の研究でも活かされる視点といえるでしょう。

本号では旧石器時代と中世の論考が提示されました。この分野の研究は我々の業務から考えれば一分野ではありますが、調査員各人の新たな研鑽に繋がることを希望しています。

(多田)

---

(公財)愛媛県埋蔵文化財センター研究紀要  
紀要愛媛

第11号

平成27(2015)年5月31日

編集・発行 公益財団法人 愛媛県埋蔵文化財センター  
〒790-8570 愛媛県松山市衣山四丁目68番地1  
TEL (089)911-0502 FAX (089)911-0508  
印刷 岡田印刷株式会社

---





